

文部科学省委託

令和2年度

高等学校における教育の質確保・多様性への対応に関する調査研究

学び続ける高校プラットフォームの運営・充実

事業報告書

2021年3月

三菱UFJリサーチ&コンサルティング

<目 次>

I.	調査の概要	1
1	調査研究の概要	1
1-1.	調査研究のねらい	1
1-2.	3年目（2020年度）の調査内容	1
2	調査内容	2
2-1.	調査内容	2
II.	調査結果報告	3
1	ヒアリング調査(事例調査)	3
1-1.	調査対象	3
1-2.	調査項目	3
1-3.	ヒアリング結果の整理	4
1-4.	ヒアリング結果	5
2	情報発信の強化	49
2-1.	情報発信強化の方法	49
2-2.	記事タイトル及びスケジュール	49
2-3.	記事内容	49
III.	ポータルサイトの運営	53
1	ポータルサイトの運営	53
1-1.	PV数の推移	53
1-2.	訪問者デバイス及びブラウザ	54
1-3.	セキュリティアタック数	55
2	本事業終了後のポータルサイト運用体制の検討	56
2-1.	現在のポータルサイトコンテンツについて	56
2-2.	ポータルサイト移管方法	56
2-3.	移管後のタスク一覧	56
IV.	3年間のまとめ	58
1-1.	学校・教育委員会の調査	58
1-2.	有識者へのヒアリング	59

1-3.	プラットフォームに関する調査.....	59
1-4.	ポータルサイトの運営.....	61

I. 調査の概要

1 調査研究の概要

1-1. 調査研究のねらい

本調査研究は、全国各地の高校教育関係者（特に高校教員）が、自発的、持続的、自律的に高校教育改革に取り組む豊富な事例等の情報へのアクセスを保障し、かつ高校教育改革に意欲を持つ実践者等の交流・対話、研修等の機能を有するプラットフォームを創設することにより、各地域の特色を活かした高校教育改革の創出、ノウハウ共有、そして成果の見える化が図られることを目的としている。

1-2. 3年目（2020年度）の調査内容

本調査研究3年目（最終年度）となる今年度は、事例調査等によって高校教育改革の実践者等による直接の交流・対話、研修等の機会（プラットフォーム）の在り方について情報収集・分析を行うことに加え、本事業終了後のプラットフォームの運営方法について検討を行う。

2 調査内容

2-1. 調査内容

本調査研究3年目となる2020年度は、以下の事業・調査を実施した。

(1) ヒアリング調査（事例調査）

- ・ 高校教育関係者の交流・対話、研修等の機会を創出する取組を行っている団体に対し、ヒアリング調査を行った。
- ・ 取材時には、交流・対話や研修の形態（人数規模、対面・WEB等の方式、教職員の参加しやすい日時設定、実践者を引き付けるテーマ設定等）に着目をした。
- ・ 事例調査の取材結果は、記事として「学び続ける高校プラットフォーム（通称：みらいの職員室）」にて公開し、ポータルサイトの内容充実を図った。

(2) 情報発信の強化

- ・ 「学び続ける高校プラットフォーム」の認知度向上のための取組として、「月刊高校教育」において、1年間同名の連載を持った。連載においては、ポータルサイト内で公開したコンテンツをもとに記事を作成した。

(3) 本事業終了後のポータルサイト運用体制の検討

- ・ 本事業終了後、貴省にポータルサイト運用を移管するにあたり、必要な体制・リソース等に関する検討・調整を行った。

II. 調査結果報告

1 ヒアリング調査（事例調査）

1-1. 調査対象

高校教育関係者の交流・対話、研修等の機会を創出する取組を行っている団体として、以下のヒアリング先を抽出した。

図表 1 ヒアリング調査対象一覧

分類	調査対象	調査日時
行政発信の取組	教育・学びの未来を創造する教育長・校長プラットフォーム（文部科学省有志）	2020年7月13日
	探究学習指導主事研修（島根県教育委員会）	2020年7月26日
民間発信の取組	未来の先生フォーラム（未来の先生展実行委員会／（一社）Teacher's Lab）	2020年9月28日
	SENSEI ノート（株式会社 ARROWS）	2020年11月11日
高校や大学の取組	SCH シンポジウム（東北芸術工科大学「SCH 東北」）	2020年10月23日
	コンソーシアム IKUNO（兵庫県立生野高等学校）	2020年11月30日

1-2. 調査項目

今年度は、高校教育改革に取り組む実践者による情報共有の場（プラットフォーム）に焦点を当て、繋がり場の創設・運営に必要な要素について示唆を得ることを目的に、次の項目について話を伺った。

1.情報共有や繋がり場のづくりを志したきっかけ・背景について

- ・ 高校教育現場やそれを取り巻く環境に対する見方（問題意識）
- ・ 繋がり場のづくりに着手した具体的なきっかけ

2.現在の取組の概要について

- ・ 現在の取組を開始する際に設定したビジョンや目標、大事にしている価値観について
- ・ 現在の取組の概要について
(取組の全体像について、各取組の目的・対象・テーマ・開催場所・方法について)
- ・ 現在の取組を進める体制について（人員、役割など）
- ・ 現在の取組の収支について（参加の有償/無償について）

3.繋がり場の設計に当たっての工夫

- ・参加者の募集・広報について
- ・参加者にとっての安心の場とする工夫（情報管理等）能動的・双方向のやりとりを生むための工夫（オンラインの場とオフラインの場のそれぞれの工夫など）
- ・この他、繋がり場の設計に当たって特に留意した点、工夫、参照した事例など

4.繋がり場の継続的な運営に当たっての工夫

- ・運営者の労力（時間）・金銭的なコストについて
- ・継続的に魅力的なテーマのある場を提供するための工夫
- ・継続的な参加者を得るための工夫について
- ・成果に関する情報発信における工夫について
- ・繋がり場の自律的な運営に関するご示唆（参加者による自主的・自律的な活動につながるヒントなど）

5.繋がり場に付加されると良いツール（要素）について

- ・参加者から好評な（反対に反応の薄い）機能、情報、ツールについて

6.今後の方向性について

- ・これまでの取組を振り返って（今後の方向性）
- ・COVID-19 の影響を受けた対応
- ・高校改革実践者へのメッセージ、「みらいの職員室」読者へのメッセージ

1-3. ヒアリング結果の整理

ヒアリング結果の整理にあたっては、ヒアリング項目に則り、「目的・ビジョン」「メンバー（体制）」「取組の概要」「『繋がり』のコツ」「これからの姿」に留意した。取材の内容は、次節で示す通り、ポータルサイトでの公開を見越した記事形式で整理を行っている。なお、記事の内容については、取材校に確認及び掲載の了承を得ている。

1-4. ヒアリング結果

(1) 教育・学びの未来を創造する教育長・校長プラットフォーム

現場の知を信じ、ワクワクする場を生み出し続ける



教育・学びの未来を創造する教育長・校長プラットフォーム HP 写真より

全国各地の高校、教育委員会による「挑戦事例」を紹介する本ポータルサイト「学び続ける高校プラットフォーム～みらいの職員室～」。令和2年度は、そのような挑戦者たちが繋がる「プラットフォーム」づくりに取り組む人々に焦点を当て、インタビューを行った。

「プラットフォーム」に関するインタビュー第1弾は、教育長・校長などの教育関係者が現場の実践知を共有し繋げる場を創造する「教育・学びの未来を創造する教育長・校長プラットフォーム(通称:School Platform)」の事務局にお話を伺いました。

「教育・学びの未来を創造する教育長・校長プラットフォーム」の概要

<p>目的・ビジョン</p>	<ul style="list-style-type: none"> 既に顕在化している課題だけでなく、2050年以降を見据えた課題についても議論をすべく、教育長・校長を中心とする学校現場や国・地方公共団体の教育関係者に加え、産業界、学術界の力をも結集し、より良い教育の実現に向けたチャレンジをする者たちが集い、つながり、試行的な取組を実践できる「場」を創出する。
<p>メンバー</p>	<ul style="list-style-type: none"> 霞ヶ関の若手行政官の有志 10 名程度がコアメンバーとして参加している他、NPO 法人 ETIC が後方支援を行っている。 コアメンバーの他イベント時は本取組に賛同する学生、社会人などが有志スタッフとして関与している。
<p>取組の概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「答えは現場にある」、「『●●だからできる』という言葉を使わない」等の信念のもと、現場の実践知を繋げ・広げ、更なる実践に繋ぐ循環づくりを目指し 2018 年 3 月から活動を開始。 春と秋の年 2 回のイベントを軸に設計しており、全国の教育長、校長の 2 つの宰といった教育関係者の対話の場を重ねており、延べ 660 名が参加している。 本 PF がきっかけとなり、新たな自律的な場づくりにも繋がっており、秋田県（大館・北秋田）・神奈川県・埼玉県戸田市・東京都足立区等で地方本部主催イベントが行われている。
<p>「繋がり」のコツ</p>	<p>◆ゼロベースの振り返りこそ原動力</p> <ul style="list-style-type: none"> 活動の根底にあるのは創設時に策定した憲章（チャーター）だ。そこで大切にされる価値は①チャレンジする実践者の集まり、②真の協働者（評論家ではなく、対等な関係）、③取組の見える化等、④開かれた、ワクワクする場、という 4 つ。この 4 つの価値を根底に据えながら、毎回のイベント終了時には、主催メンバーが大切にしたい価値を改めてゼロベースで振り返る「価値ミーティング」を行っている。このゼロベースでの振り返りによって、全く同じイベントは二度とない、成長しつづけるプラットフォームが生み出されている。 <p>◆肩書を外し、来たい人が主体的に集う場</p> <ul style="list-style-type: none"> このプラットフォームは参加者がワクワクし、楽しいと感じる場であることが大きな特徴だ。その背景には、参加者がバックグラウンドはあるが、肩書を外してフラットに対話できる環境がある。また、このプラットフォームは参加者層の拡大を志向すること以上に、来たいと自ら思う人が集う場であることを大切にしている。主体的に集うフラットな場であるからこそ、「知りたい・話したい・繋がりたい」といったニーズに応えられるプラットフォームなのだろう。
<p>これからの姿</p>	<ul style="list-style-type: none"> プラットフォームによって生み出された新たな取組の可視化や、広報の充実によりさらにパワーアップするとともに、「地に足のついた議論」や、「参加者の主体性を重視する」など憲章（チャーター）の価値観を基盤に、さらに進化しつづけていく。 <p>— 次イベントのご案内 —</p> <p>「今だからこそ現場みんなで創造する教育・学びの未来」シリーズ 第 2 弾「学校再開」 日時：令和 2 年 8 月 8 日 15 時～</p>

「答えは現場にある」の信念のもと、繋がり場の場づくりが始まる。

——今日は、教育・学びの未来を創造する教育長・校長プラットフォーム事務局の佐藤悠樹様、白井美由紀様、弓岡美菜様、お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。早速ですが、開始時間が平日夜 10 時からというのに驚きました。皆さんはいつもこの時間から打ち合わせなどをなさるのですか？

白井（敬称略、以下同様）：はい（苦笑）というのも我々の活動は、個々人がプライベートに行う「有志」の取組です。したがって、完全に業務時間と切り分ける、となるとこんな時間になってしまいます。でも、このプラットフォームの活動が、本当に楽しくて。ただ楽しいだけでなく、日々の職務を頑張ろう、と思える大きなエネルギー源のようにしているので、遅い時間からでも辞められません（笑）正直、こんなにワクワクする場になるなんて、当初スタートしたときには想像できませんでした。

——なるほど、楽しそうな笑顔を見ているだけでも、このプラットフォームが楽しい場なのかなと思わされます。では、まずはこのプラットフォームが始まるきっかけを伺ってもよろしいでしょうか？



【写真右上】：白井様

【写真左下】：佐藤様、【写真右下】：弓岡様

佐藤（敬称略、以下同様）：以前から、次から次に積み重なる教育課題に対し役所などの行政組織が解決策を考えるよりもずっと前から、現場の実践者たちはそのような課題に向き合い、何らかの解を見出だし実践していると感じていました。この実践者たちの知を広げたい、そのためには、この実践者たちが持つ知を互いに繋がらせる仕掛けがあれば、より良い実践がどんどん広がっていくのではないかと思います。場づくりを志しました。場づくりに当たっては 4 つのキーワードを大切にしました。

「答えは現場にある」

「●●だからできる」という言葉を使わない」

「地に足のついた議論」

「一点突破・全面展開」

弓岡（敬称略、以下同様）：このキーワードとも重なりますが、我々が創設時から大切にしているのは憲章（チャーター）です。このチャーターは、プラットフォームの立ち上げの際に策定したもので、発案した文科省の若手行政官がツテを辿り繋がった、プラットフォームの「発起人」（7名の教育長・校長）との対話の中で紡がれた大切な言葉たちです。ここには、私たちが価値を置く尊重したい考えを表しています。

- ①チャレンジする実践者の集まりであること
- ②真の協働者であること（評論家ではなく、対等な関係）
- ③各種取組の見える化や積極的な情報発信を行う場であること
- ④開かれた、ワクワクする場であること

<詳細のチャーターはこちら URL : <https://drive.google.com/file/d/1qf-oYqhoSeBdKd0taQ138FiP9jhUKJ5b/view>>

——冒頭の楽しそう、という印象は、「ワクワク」など、このチャーターを背景に持つものだったんですね。確かに昨年度行った高校教育関係者との座談会も「次はどんな話に繋がるだろう・・・？」と事務局も参加者もワクワクしていたのを思い出しました！では、ここからは現在の取組の概略をお聞かせください。

「大事にしたい価値は何か」を問い続け、対話の場を熟成させる

白井（敬称略、以下同様）：これまでは、春と秋の年間 2 回の大きなイベントを軸に活動してきました。春の「総会」と言われるイベントは文字通り、開かれた場となるよう、定員の許す限り、教育長・校長に限らずどなたでも参加いただける場としています。秋のイベントは「具体のアクション、チャレンジを生み出す」ことも視野に入れ、教育長・校長とその右腕の皆様に限った場も設ける工夫もしてきました。春の場は多様な実践者との繋がりを生み出す強みをもち、秋の場は具体的なチャレンジを生み出すための深い議論を行える安心感が強みです。

こういったプログラムの企画は、「**チャレンジをしては、振り返り再構築する**」という試行錯誤の中で生み出されています。例えば秋の場で、安心感と次への具体的なアクションの創出を大切にしよう、と設計したのも、春の場での反省を受けた改善提案です。当初の春の総会は、キラキラしたスターのような人のところに人が集まって、その方の話を聞くだけ、という場面もあり、原点であるチャーターに戻り、「対等な協働者」として、「地に足の付いた議論」や具体的なアクションに繋がる双方向の対話が必要だと感じました。

2020年3月のイベントからは新型コロナウイルス感染症の影響を受け、オンラインで実施するチャレンジをしています。

——そういった些細な気づきも大切にしていることには、どんな工夫があるのでしょうか？

佐藤：我々が大切にしていることの一つに、毎回のイベントの振り返りを行う際に、改めて私たちが最も大切にしている価値は何かを問い直す通称「価値ミーティング」をやっていることがあげられます。アンケートなどで参加者の方々の意見から振り返ることはもちろんですが、事務局である我々が改めて、イベントで目指していた価値を実現できたか、良かったところ・悪かったところはないか、など、じっくりと時間をかけて振り返りの対話をします。その**対話ののち、では次のイベントがどうあるべきか、ということ**をゼロベースで考えます。ゼロベースで考えられるのは、毎回の価値ミーティングで、**自分たちが大切にしたい価値を改めて確認しあっているから**だと思います。

価値ミーティングには、事務局である ETIC.の有志メンバーも参加しています。行政官では気づけない視点での指摘や、アイデアを与えてくれるので、とても良い刺激になっています。例えば、このプラットフォームの構想段階の頃に ETIC.有志メンバーから発されたキーワード：「場づくり」に対し、行政官の頭の中は「何それ？」とクエスチョンマークでいっぱいになりましたよ（笑）正直、我々はきちとした会議の運営には慣れていますが、フラットな対話の場をつくるノウハウはあまり持っていません。行政官でない新たな視点をくれる ETIC.のコメントはいつも本当に助かっていますね。

弓岡：ETIC.には、「**バックグラウンドはあるが、肩書を外して議論できる場**」の作り方を教えてもらったように思います。ベテランの教育長も、校長になりたての方も、参加する皆が肩書を外してフラットに話せる場が熟成してきたように思います。

——対話が生まれる場づくりの実現に向けて、ゼロベースで再構築をし続けているのですね。ここまで読んだ方もイベントに参加してみたいと思うと思いますが、参加費はどの程度かかるのでしょうか？

「楽しい」と思う人が肩書を外して集う場。「ワクワク」こそが場の原動力。

弓岡：イベントの参加費はオフラインで 1000 円、オンラインで 500 円と設定しています。このような価格設定に留められているのは、スタッフが全員有志で無償ボランティアだからです。いただいた参加費は資料の印刷費などに充てています。

ちなみに、講師の方に謝金はお支払いしていません。この謝金ゼロにも実は喧々諤々（けんけんがくがく）がありました。行政官として仕事をする中では、講師の方に謝金をお支払いすることの方が普通です。しかし、話し合いの末、このプラットフォームをチャーターの理念の通り「来たい人が自発的に来て、ワクワクする場」にしていきたい、そのためには、謝金をもらって招かれて来る場ではなく、登壇者も含めて、自発的に来たいと思う人が集い、全員が当事者として参加する場であるべきと考えています。そういった考えから、現在は謝金ゼロで運営しています。

——チャーターの理念を軸に据えられているのですね。チャーターという価値観を強く共有しながら、価値ミーティングを重ねゼロベースでイベントを創り上げられる様子をここまでで伺うことが出来ました。ところで、皆さん、行政官としてご多忙そうですが、時間のかかりそうな価値ミーティングにプライベートの時間を割くのは大変かなとも思いましたが…、いかがでしょうか？

白井：冒頭申し上げたとおり、私は純粋に楽しいからやっています！日々の本来業務の立場や肩書をなしにした状態

で、フラットに教育課題について話せる人間関係ができ、それが広がっていると実感できることも、楽しいと感じます。

佐藤：僕も楽しいことは大きいですね。この場で様々な学校現場の方とリアルな議論をさせていただけることは、本当にありがたい限りです。それに加えて、いつも思考を止めず、新しいものをゼロベースで考え生み出し続ける活動に、達成感を感じています。地方で自律的に立ち上がっている秋田、足立区、神奈川、戸田などの様子を見ていても「楽しい」、「ワクワク」が原動力になっているように感じます。

——では、最後にこのプラットフォームの今後の課題や方向性についてお伺いしても良いでしょうか？

今後の更なる進化へ、そして次回イベントのご案内！

佐藤：現場の実践知をもっと広げたい、という想いはチャーターのとおりです。きちんと取組を可視化していきたいですし、現場の素晴らしい実践に焦点を当てたインタビュー記事のようなものも増やしていきたいと考えているのですが、中々そこまで手が回っていないというのが正直なところ¹。

白井：そうですね、私もまだまだ発信の機能が足りないな、という課題は感じています。あとは、有難いことにこのプラットフォームをきっかけとして地方本部の立ち上がりの他にも、学校同士の協働などが始まったりしているようなのです。きっといろいろなところで繋がりの芽が咲いているのだと思うのですが、フィードバックする仕掛けがないので、そういった新たな芽をうまく把握できていません。プラットフォームをきっかけとして始まった新たな取組を把握したいなと思っています。

弓岡：我々は3年近くの活動を通じて、**やっとなりのようなものは出来ました**が、**前述の価値ミーティングのとおり、いつもゼロベースで再構築しています**。なので、**まだまだ成熟したプラットフォームではないと思っています**。確かに参加数が増えたり、参加者の地域属性が広がったりという成果も感じています。無理に拡大する、ではなく「**来たい人の主体性**」や「**来た人のワクワク**」を忘れることなく、成長していきたいです。

佐藤：そうですね。冒頭紹介した4つのキーワードのとおり、我々は創設時から「地に足のついた実践」という価値を大切にしていますが、このことを参加者の皆さんも共感してくださっていると感じています。これまで、国の政策を説明するいわゆる行政説明を一度も行っていないのも、常に主役は現場の皆さんでありその実践であるという考えに基づくものです。

来たいと思う実践者たちが、地に足のついた実践を共有しあう場を、これからも作り続けていきたいと思えます。悩みも含めて**本音で議論ができる場だからこそ、参加者にとってのトリガー（始めるきっかけ）になるのだ**と信じています。

——ますます、本プラットフォームが進化していくと感じました！**みらいの職員室でも「学び続ける高校」をキーワードにしていますが、こちらのプラットフォームがまさに「学び続ける場」**なのですね。次なるイベントにぜひ参加してみたい読者もいると思いますが、**次のイベントはいつ頃でしょうか？**

¹ なお、過去に公開した記事（埼玉県戸田市の例：<https://note.com/schoolplatform/n/nafe5bda447b2>）のような現場の実践に焦点を当てた記事を増やしていくことを目指している。

佐藤：有難うございます！次回は8月8日（土）15時から、「今だからこそ現場みんなで創造する教育・学びの未来」シリーズの第2弾「学校再開」をオンラインで開催します。新型コロナウイルス感染症による長期休業を経て学校再開をする現場の実践者たちがオンラインで議論を行います。オンライン開催は、本年3月に元々は対面で開催予定だった2020年総会を、状況を踏まえオンライン開催に切り替えたところから始まっていますが、オンラインの強みは、本当に様々な地域からご参加いただけるということです。事務局としても、オンラインで議論を深められる場をデザインしようと思っていますので、どうぞ参加を検討してみてください！

<イベントページ： https://school-platform200808.peatix.com/?fbclid=IwAR23e7N3gRqBIMNUSwIO_gIwo1QHUGqYJF9DNkfvb5kud3wXGryGYowBTRY>

——有難うございます。これまでも高校関係者とのやりとりのある皆さんですが、最後に、この読者である「学び続ける高校」に関心を持つ方々に熱いメッセージをお願いできますでしょうか？

白井：これまで、教育長・校長プラットフォームでは小中学校校長の参加が多かったのですが、今後、ぜひ高校関係者も増やしていきたいと思っていたところです。小学校、中学校から高校まで、さらには出ていく社会まで見据えて学校種を超えたプラットフォーム、互いの実践の刺激をしあえる場にしていければと思っています。

弓岡：私自身、高校生活（特に体育祭！）が本当に楽しくて、今も大切な思い出です。多くの子供たちにとって、高校は人生ではじめて自分の「進むべき路」を選びとる経験を経て入学する学び舎です。自分で選んだ学校が「学び続け、進化し続ける」ことは、生徒にとっても嬉しく刺激的だと思います。教育長・校長プラットフォームには「学び続ける」ことに意欲的な先生がたくさん参加されますので、ぜひご興味ある方はご参加頂けたら嬉しいです。

佐藤：私にとって高校は部活の思い出しかなく学びの記憶は皆無ですが（笑）、高校生活が様々な意味でその後に影響を与える重要な時期ということは強く感じています。具体例を挙げるまでもなく、高校段階は特徴的で多様な好事例の宝庫です。現在、意欲的な高校関係者の皆様による学び合いが広がっていると伺っておりますが、ぜひ本プラットフォームにもご参加をいただき、議論・対話の場の厚みを増していただけたら大変ありがたいです。

——本日は熱量のこもったインタビュー、誠にありがとうございました！

おわりに：

編集部：若く志を持つ霞ヶ関の有志の発意から始まったこちらのプラットフォーム。現場にこそ答えがある、のキーワードのとおり現場の実践知を信じ、繋ぐ場をいかに実践家たちにとって意味のある場に出せるか、試行錯誤を続けている事務局の姿がそこにはありました。オンラインインタビューとは思えないほどの熱量で、ぜひ佐藤様、白井様、弓岡様をはじめとする事務局の方々にも直接触れ合っ感じていただきたいと思います。（次回イベントにご都合のつかない方も10月以降にイベントが予定されております！）

(2) 探究学習指導主事研修

探究的な学びの推進者を、探究的な学びにより育て、繋げる



インタビューにお答えいただいた馬庭探究学習指導主事（左）と立石調整監（右）

全国各地の高校、教育委員会による「挑戦事例」を紹介する本ポータルサイト「学び続ける高校プラットフォーム～みらいの職員室～」。令和2年度は、そのような挑戦者たちが繋がる「プラットフォーム」づくりに取り組む人々に焦点を当て、インタビューを行った。

「プラットフォーム」に関するインタビュー第2弾は、島根県教育庁 教育指導課のおふたりに話を伺った。

プラットフォームの概要

<p>目的・ビジョン</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 島根県の教育の特色の一つである「地域課題解決型学習」のより一層の推進に向け、探究的な学びを教科横断的に繋ぐ要として期待される「総合的な探究（学習）の時間」。 ◇ これを有効に活用するための校内体制の確立を目指した。
<p>メンバー（体制）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 各県立高校に探究学習の推進担当者を位置づけ。また、島根県教育庁に、探究学習指導主事を新たに設置し、各校の担当者の指導・育成、ネットワーク形成を担当。
<p>取組の概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 各校の探究学習推進担当者向けに、年間での研修プログラムを実施。必須の座学研修だけでなく、各校の担当者が各校の課題を自ら設定し、その解決のための一手を考え取り組むという実践的内容を盛り込んだフォローアップ研修を実施。
<p>「繋がり」のコツ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 研修課題に取り組ませる際には、各校担当者を小グループに分けて、取組の中での悩みや課題を共有し、協議する機会を創出。こうした機会によって、研修後も相談し合えるネットワークを創出することを期待している。
<p>これからの姿</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ オンラインツールの活用による各校間のネットワーク形成、また探究学習指導主事による各校の課題の聞き取りと伴走支援のベストミックスを引き続き探究していく。

まだ誰も経験したことのない役職

——本日はよろしくお願いします。インタビューの趣旨である、高校教育関係者が学び合うプラットフォームづくりという話題に入る前の前提知識として、島根県で初めて、そしておそらく全国で初めて「探究学習指導主事」という役職を、今年度（令和2年度）より教育庁に新設された背景についてお聞かせいただけますか。

立石（敬称略、以下同様）：島根県内の県立高校では、「しまね留学」と銘打って県外から生徒を募集しているのですが、県外から島根県を進学先を選んでもらうため、「地域課題解決型学習」をアピールポイントとして掲げています。生活のすぐそばに課題があり、それをじっくりと探究できる。21世紀型の学びのあり方が島根県にあるということ、魅力として伝えてきました。

特に離島・中山間地域の小規模校では、少ない生徒と少ない教職員では充足しきれない学びを補うため、教職員が自然と地域の中に学びの場を求め、地域の人に支援を要請していたという経緯があり、そのことが生徒の学習意欲や資質の向上に繋がっているという手ごたえもありました。これらの背景から、平成31年2月に策定した「県立高校魅力化ビジョン」では、地域課題解決型学習を島根県の教育の特色の一つとすることを宣言しました。

一方、各校の取組は進んできてはいたものの、それが本当に効果的な形で進められているかという点に関しては、迷いがありました。教科横断的で探究的な学びの要として、総合的な学習の時間を有効に活用したいという想いがありつつ、それが十分にできる体制が整っていないと感じていました。

その理由を考えたときに、「総合的な学習の時間を専門的に担う指導主事がない」ことに思い至りました。教育庁の体制として、他教科の指導主事が兼任で総合的な学習の時間の指導も行うというような位置づけでした。その構造が各校の体制にも反映されて、指導の体系化・構造化に至らないのではないかという仮説です。各校に、総合的な学習(探究)の時間に関してアンケートをとったのですが、実施体制については、担当者が年度ごとに変わる流動的なパターン、あるいは特定の先生やコーディネーターが1人で役割を背負っているような、固定化・孤立化のパターンが少なくないという実態が明らかになりました。

このような課題認識に端を発し、島根県で今後、地域課題解決型学習を特色として打ち出すのであれば、そうした学習に係る専任の指導主事をつけて、各校の支援体制を確立し、持続可能性・発展性の高い仕組みにする必要があるのではないか、という結論に至ったというのが、今年度、教育庁に探究学習指導主事を新設した背景です。

——そのような経緯の中で、まだ誰も経験したことのない新しい役職に抜擢されたのが、馬庭さんということですね。馬庭さんはこれまで、どのようなキャリアを歩んでこられたのでしょうか？

馬庭：10年くらい前にも一度教育庁勤務となり、その際に指導主事として、地歴・公民科と兼任しながら総合的な学習の時間の時数や内容の指導を行っていたことがありました。その後は飯南高校に赴任し、教務主任として管理職や教職員、コーディネーターと相談しつつ、地域ぐるみで行う地域課題解決型学習の体制づくりやカリキュラム作りを行いました。次に着任したのは雲南市の三刀屋高校で、学年主任として、総合的な学習の時間の内容についてコーディネーターと打ち合わせたり、各教科と総合的な学び、地域資源の接続に取り組んできました。

なぜ私が、という点でいうと、分からないところもあるのですが（笑）、継続的に魅力化校（島根県が平成 23 年度から進めてきた「教育魅力化推進事業」対象校）に関わってきたことで、地域の人やコーディネーターなど、教職員以外の方と一体となって物事を進めていくことに慣れていたり、町や市をあげて学校を応援してくれることの良さや、その中で育った生徒が地域に愛着を持つようになる姿を、肌身で感じていたからかな、と思っています。

——そうした馬庭さんの豊富な現場経験の中で、先ほど立石さんが仰ったような、体制面の課題からくる困りごとはお感じになっていましたか？

馬庭：どこか相談できるところが欲しい、誰かと悩みを共有しながら取り組みたい、ということは常々感じながら活動していました。他の学校はこういう時どうしているのだろう、という情報やノウハウ、指針といったものが、一元化して集まっている場や窓口があればいいな…と感じていましたね。

立石：馬庭さんのように、積極的に取り組んでいるからこそ悩む、というパターンもありますが、先のアンケートからは、そもそも総合的な学習の時間に、何に取り組めばよいのか分からない、といった教員も多かったのです。加えて、校内で誰が責任を持って、総合的な学習（探究）の時間や、その時間を活用した地域課題探究型学習を進めていくのかという点も曖昧でした。そこで、教育庁に探究学習指導主事を配置するのに合わせ、各校に1人（全日制・定時制それぞれ）ずつ、「探究学習推進担当者（以下「探究担当者）」を設定することにしました。現時点では、各校の状況に合わせて1～2年くらいのサイクルで担当者を引き継いでいってもらい、探究型学習のノウハウを備えた教員を各校に増やしていきたいと考えています。

学び合うチームを作る

——各校の探究担当者と、探究学習指導主事という体制をベースに、まさに馬庭さんは、現場で必要性を感じていた「悩みを共有でき、相談できる場・繋がり」を、自ら作っていくお立場になられました。現在はどうのお仕事に取り組まれているのでしょうか？

馬庭：各校の探究担当者向けの研修を企画・運営しています。4月と2月を必修の研修に設定し、その合間に、教育センターや大学、民間企業等による任意参加の研修も企画しています。ただ、4月に予定していた必修研修は、新型コロナウイルスの影響で延期になってしまいました。6月中旬にようやく、オンライン研修という形で仕切り直すことができました。その後は、各校を訪問し、各校の先生方の悩みを聞きながら今後の打ち手を考えています。

——新たな役割、新たな役職の方々が初めて集う場が、急遽延期、そしてオンライン開催となったことのご苦労は当然大きいものだったと思います。工夫されたのはどのような点ですか。

馬庭：まずは探究学習指導主事や各校の探究担当者の役割を座学で伝えることも重要なのですが、各校の担当者間でコミュニケーションをとる時間を非常に重視しました。研修延期のある意味プラスの結果として、各教員が、自らの役割に

ついて考察・内省する時間が十分取れたという面があったようです。そこで、探究的学習の推進に係る課題感が近い参加者同士でグループを設定し、Web 会議システムの機能を使い、少人数でのワークショップを行いました。ただ、オンライン研修が初めてで不慣れだったこともあり、実際はワークの時間があまりとれなかったのは反省点でした。

立石：探究学習の推進に関わる先生方の悩みは、①カリキュラム・マネジメントの進め方、②年間指導計画の組み立て方、③授業などでの生徒への伴走支援のあり方、の3つに大別されるというのが昨年度のアンケートから分かっていたので、このテーマの中から希望を募り、グループ分けを行いました。

馬庭：実はこうした小グループによるワークの時間の設定や、どういうメンバーでグループにするかなどは、参加者の様子を見たり先生から意見を聞いたりしながら設定したものです。

——まさに研修のあり方自体も、探究によって、柔軟に改良が加えられていくのですね。

馬庭：それで言うと、必修研修、任意研修の合間に、フォローアップ研修を盛り込むことにしたのも改良点です。各校で、探究学習を進めるために乗り越えるべき自校の課題を設定し、それに対する取組に何らか着手してもらうよう依頼していますが、この検討のマイルストーンになるのがフォローアップ研修です。また、お題について議論、相談できる繋がりとして、4～5名の担当者からなる8つの小グループを改めて作り、第1回フォローアップ研修（7月実施）から第2回（10月末実施予定）までの間に、最低一度はグループ協議の場を設けてもらうようお願いしています。既に7月末時点で2グループが協議を実施したようです。この繋がりが、今後広がっていくとよいなと考えています。

——6月の必修研修時の小グループとはまた異なるグループを設定したのですか？

立石：これまでの研修から、先生方の悩みは先ほどの①～③に大別・集約されつつも、多分に重複しているということが分かりました。あまり課題感に捉われず広く関心や悩みを共有することで各校の新たな道が開けるのではないかと感じたため、7月のフォローアップ研修からは、カリキュラム編成上の前提が大きく異なる普通科と専門学科を分類したうえで、それ以外はランダムにグループ分けを行いました。

馬庭：研修を数回受けて終わりではなくて、こうしたグループ単位での共有の場づくりによって、継続的に関係性を続けて、相談し合えるネットワークを維持させたいという想いがあります。ただ現在のスタイルは、初めから想定していたわけではなく、この研修を共同で企画・運営している（一財）地域・教育魅力化プラットフォームとも相談しながら、「それもいいね、これもいいね」、というように、試行錯誤の中で考案し、実施しています。

立石：こうした形式の研修を機能させるうえで、民間事業者の視点、スキルには助けられています。教職員から見た目線だけではなく、外部からの目線で物事を整理する方法が新鮮で、例えば、企業経営、働き方、費用対効果など、新しい視点を提供してくれることに有難さを感じています。

——オンラインの活用については、こうした場づくりにおいてこれから欠かせない視点になると思います。この点についてお感じのことをお聞かせいただけますか。

立石：オンラインという手法が増えたことで、研修が気軽に、業務の合間の時間で実施できるようになりました。島根県土は東西に非常に長く、集合研修を何度も開催することが難しいという実態もあったので…ただ、オンラインでうまくコミュニケーションを行うには工夫も必要ですね。個人的には、はじめにアイスブレイクとして話を盛り込んで、雰囲気柔らかくするよう心がけています。

——あるオンライン研修で、立石さんが冒頭、あえて手書きのフリップボードを作成して画面に写し出されたことがありましたね。実際に対面できないからこそ、あの手書きのフリップはとても温かみを感じて、心がほぐれました。

馬庭：オンラインの便利さはもちろんありますが、私はそれを補完するアクションとして、やはり1校1校に足を運んで、話を聞くことを続けたいと思います。今後はオンライン、リアルなど、いろいろな方法のベストミックスを模索していく段階かと思います。

高校教育関係者へのメッセージ

——探究的な学びの主体を育成するプラットフォームづくり自体が、探究的な姿勢・手法で作られようとしていることがよく分かりました。最後に同じく挑戦する高校教育関係者へのメッセージを頂けますでしょうか。

立石：**境界線を越える**。これからは、様々な立場の人々が繋がるが必要になる時代だと思います。これまで、学校は内側だけで課題解決しようとしてきた傾向がありますが、学校・教育委員会・民間など、様々な主体がベストミックスして、共に子どもを育てていく認識が必要だと思います。また、教師と生徒も、お互いに学び合う関係性になっていければよいと思います。島根県は、率先してそれらを実践していきたいと思います。

馬庭：答えのない問いに向かい合っていくためには、いろいろな人の意見を聞いたり、共有し合って歩んでいくことが必要だと思います。探究のあるべき姿には、いろいろな姿があると思います。研修の機会や各校への訪問等を通して、自分自身も現場の取組を知りながら、伴走支援のかたちを模索していきたいです。

——本日は貴重なお時間をありがとうございました！

おわりに：

編集部：本取材を通して驚いたのは、年間を通した研修のPDCAサイクルの柔軟さとそのスピード感でした。参加者の意見をもとに、すぐに振り返りを行い、次回の運営に反映させていく、そのスピード感はまさに探究の範を示しているように思えました。また、参加者の研修づくりへの主体性が、こうした動きを支えているとも感じました。関連して印象

的なエピソードがあります。筆者が見学させてもらったオンライン研修で、当日に一部資料に内容の追加・変更があり、事前送付資料が差し替えられることになりました。その際、参加者からコメントで、「資料に変更があるということは、日々成長しているということ！いいと思います」という旨の書き込みがあったのです。研修の目的という芯は持ちつつも、それを達成するための柔軟さを、企画者、参加者が共有し、前向きに受け止めることの重要性を感じました。

(3) 未来の先生フォーラム

未来志向、ボーダーレスを強く意識して創造される「つながり、広がり、生まれる」場



未来の先生フォーラム 2020 HP 写真より

「プラットフォーム」づくりに取り組む人々に焦点を当てるインタビューの第三弾。

今回は、自ら学び、専門性を向上させたいと願う先生たちをはじめ、教育業界の関係者が 3000 人規模で来場し、学びあう日本最大級の教育イベント「未来の先生フォーラム 2020」の実行委員会にお話を伺いました。

※なお、未来の先生フォーラムは、2019 年まで「未来の先生展」の名称で実施しています。

「未来の先生フォーラム 2020」の概要

<p>目的・ビジョン</p>	<ul style="list-style-type: none"> 日々変わる社会に対し、求められる教育の在り方も変わる中、学校教育・各教科教育・オルタナティブ教育・生涯教育などそれぞれの領域・分野で活動している方々が一か所に集まることで、参加者が“つながり”、知識・視点・つながりが“広がり”、新たな取組や知識が“生まれる”場を作ることを目指している。
<p>メンバー</p>	<ul style="list-style-type: none"> 2017年度の立ち上げから実行委員長を務める宮田純也氏を中心に、スタッフ1-2名を加えた計3名程度で当日に至るまでの企画・運営・広報を一手に担っている。 当日運営については、夏の音楽フェスティバルなどを運営するイベント業者などに運営委託をし、ボランティアスタッフを中心に運営している。3名程度の中心メンバーは、全体管理を行っている。
<p>取組の概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> UAEでの教育イベント参加を経て、立場や実践する教育内容の違いを超え、非営利的な教育イベントを日本で開催したいと、「つながり、広がり、生まれる」場を作るとの信念のもと、2017年に未来の先生展を初開催。 その後、1年に1回の頻度でイベントを開催しており、初回の2,569人参加から、さらに規模を拡大し2019年には3,300人が参加。10代～60代と広い世代の人々が集まっている。また、4割が1都3県以外の地域から来場している。
<p>「繋がり」のコツ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆「理念」と「感動」を体感する場にする <ul style="list-style-type: none"> 活動の根底にある理念は、「より良い人生・社会の根本には教育がある」という信念。多様な実践家同士の繋がりを広げ、新たな取組や知識、そして教育を生み出したいと考えている。 その理念のもとに行われるユニバーサルなフォーラムは、様々な実践家や学びと触れ合い、感動を体感できる、唯一無二の場となっており、リピート参加が多い。 ◆現状否定・批判はしない「未来志向」の前向きな場にする <ul style="list-style-type: none"> このプラットフォームの立ち上げの際にご助言いただいた方の1人から「現状の否定や批判ではなく、前向きに」という言葉により、イベントの紹介文は「これをやりたい」という未来志向の内容に限定している。また、広報資料には原色を使用するなど前向きな印象が伝わる工夫や、セッション登壇者も前向きな協働や対話の姿勢がある方をお願いするなど、未来志向を強く意識している。
<p>これからの姿</p>	<ul style="list-style-type: none"> オンライン開催の、住む場所によらない気軽な参加を促せる利点と、直接対面によってこそ得られる協働・創造の利点の両方を掛け合わせてハイブリッドな展開を行っていきたいと考えている。今後はさらに地域での活動にも着目できるよう、地方開催も目指している。 <p>一次回イベントのご案内ー</p> <p>「未来の先生フォーラム 2020」今年のテーマは「問い直し」</p> <p>日時：2020年11月22日（日）、23日（月）10時～18時</p> <p>場所：完全オンラインでの開催</p>

立場に関わらず未来を話せる場を生み出す。0→1 の挑戦

——今日は、未来の先生フォーラム（旧：未来の先生展）2020 の実行委員長である宮田純也様にお話を伺います。早速ですが、日本最大級の「繋がり場」を創設されていると聞いていますが、どのようなきっかけでこれほどの場を始められたのですか？

宮田（敬称略、以下同様）：大学院でオルタナティブ教育や教師教育などを研究していた頃から、日本には製品などを宣伝する教育産業系の大規模イベントはあるが、教育における実践者中心のソーシャルな領域横断型の象徴的な学びの場があまりないこと、その場が提供することの社会的意義をなんとなく感じていました。UAE での大規模な教育イベントに参加した際に「日本でも、アカデミックな世界だけでなく、**もっと様々な立場の人々が繋がる場が、今の社会に必要なのでは**」と思い、当時、「目標参加人数が 1 万人の場を立ち上げる！」と無謀にも宣言しました。そこからはもう、1 日 12 アポイントなど、とにかく賛同者を集めるべく様々な教育界の実践者のもとへ駆けずり回る日々が始まりましたね（笑）

——なるほど、これほどの規模のイベントを創造するとなると、その賛同者を得るためにはかなりの時間と運営体制が必要そうですが、どのような体制で始められたのでしょうか？



【写真下】：宮田様

宮田：確かに「0→1」を生み出すので、相当な体制がありそうですね（笑）構想実現に着手し始めた頃は運営事務局として立ってれていた方はボランティアベースで数名程度いました。しかし、やってみると大変で、離れていくメンバーもおり実働を一人でやる事態になったり、お金も自分だけで全額分の立て替えをしたりと、いろいろ大変でした。一方で、いろいろな方が協力してくださり、人の紹介などの応援をしてくださる方たちもいたのでありがたかったです。イベント前日まで人が来るかどうか分からず、イベント前夜は人生ではじめて眠れなくなるほどにプレッシャーを感じていました。しかし、当日皆さんがお越しになり、喜んでくださったので、参加者の皆さんには本当に今でも心から感謝しています。未来の先生フォーラムは参

加者に喜んでもらうことが一番大切だという一貫したポリシーも、その時の経験から来ています。

一人で教育界のオピニオンリーダーの方々に賛同のお願いをしにいくのは正直に申し上げると大変でしたよ（苦笑）実際の完成形が見えない、雲をつかむようなぼんやりとした構想だったので、粹に感じてくださりイベントに登壇してくれる方もいれば、冷たい対応で無碍（むげ）にされたりすることもありました。しかし、**自らの理念を伝えるためには直接お目にかかってお願いに行くことが必要だ**と思っていたので、この時間を惜しむことはしませんでした。今思い返せば、このことが「イベントの質が高い」と言われている鍵の一つだと思います。

——**理念を伝える、ことを大切にしていらっしゃるのですね。宮田様の思う「理念」とはどんなものでしょうか。**

宮田：冒頭の「様々な立場の人が参加できる場を作りたい」というところとも繋がるのですが、「より良い人生・社会の根本には教育がある」と信じ、**多様な人々を、もっと繋げたら**、と願っています。自分自身の話になりますが、中学時代や高校時代、大学時代も周囲の環境に馴染みにくいというか、なんとなく違和感のようなものを持っていました。そんな経験もあってか、世の中には絶対的な正解はなく、多様性を認め合えるゆとりのようなものがあるほうがいいなと思っています。学校教育も、唯一の正解を求めるのではなく、多様性を受け入れられ、様々な価値観が共存している方が、多くの方が生きやすくなるのではと信じています。

既に「多様」な実践は学校・学校の外など子どものいる現場にはあります。そういった多様な実践に関心を持つ人々を集め、参加者が“つながり”、知識・視点・つながりが“広がり”、新たな取組や知識が“生まれる”場を作りたいと思っています。同じ領域や分野で固まってしまうずに、様々な立場の人が話し合うことで新たな発見や気づきがあると信じ、**徹底的な領域横断を志向し、ボーダーレスな場を追及しています**。ある意味、なんでも売っている雑貨屋のようなイメージで運営していますね。

そのような理念のもとフォーラムを運営しているので、自社の宣伝ばかりで誰かを排除したり、あるいは前向きな対話をしなかったりという方はご登壇をお断りしています。

——**ご自身の原体験も影響して、徹底的にボーダーのない場を作っていらっしゃるのですね。その他に、心がけていらっしゃることはありますか？**

現状の否定や批判は一切しない、未来志向の場を作る

宮田：これまでは、教育界隈は、真面目に向き合うがゆえに他者への批判・否定が生まれがちなように思います。A が否定される場はAを一生懸命やってきた誰かが参加しにくい場になります。そういった考えから、私自身の書くメッセージには一切現状否定や現状批判の言葉は載せません。これは、立ち上げに奔走していた際にある方からの、「否定や批判ではなく前向きに、『これをやりたい』『あれをやりたい』という**未来の話だけ**をしたほうが良い。」というご助言がきっかけです。それ以来、今も未来志向を強く意識しています。**何かが否定された、と見ると「その場に行くか否定されるかも」という不安も生まれ参加者を遠ざけてしまいかねないですからね。**

また、未来志向であることが参加者にも伝わるように、ロゴマークや広報資料も原色を用い、前向きな印象を持てるようにしています。また当日の運営については夏の音楽フェスティバルのイベント運営業者などに委託したりして、教育分野外の

ノウハウも用いることでカジュアルな雰囲気を作っています。あらゆる立場の人が、前向きに、カジュアルに未来に向かって「こんなことをしてみたい」と話せる場にしたいと思っています。

——だから 20 代の方の参加も多いのでしょうか？

宮田：はい、この未来の先生フォーラムは、これまでも 10 代～60 代までのプロアクティブな参加者が集まっていたいており、また参加者の 4 割が 1 都 3 県以外の地域から来場してくださっています。広報を Facebook に焦点化して、「いいね」や「シェア」を多く得られたことも多様な世代・地域の方にお越しいただいた要因かもしれません。

2017 年度の 2,569 人から、質・量ともに拡大を続けており、2019 年度は 3300 人近くの方にお越しいただきました。2019 年度の満足度は最高が 5 で平均満足度が 4.36 になるなど、高い満足度を自負しています。

この満足度の高さの要因の一つには、頭で考えるだけではなく、自分以外の実践家と直接触れ合い、感動する、という**「体感」が得られる場**だということがあると思います。**体感することが心を揺さぶり、そして行動変容につながる**と思っています。

そして何より参加者の方お一人お一人の志が高く、また登壇者の質が高いことにより、このフォーラムの質が上がり続けているのだと思います。

2017 年度の立ち上げの際には、周囲からも「そんな規模のものをできる訳がない、上手いかない」、「本当にやるの？」と言われたりなど、はたから見るとクレイジーな取組だったので、当初から順調だったとは言えません（苦笑）しかし負けず嫌いな私自身の気質と、「これだけ大きなことを言っている色々な人に協力してもらっておきながら、失敗したら大好きな教育業界からいられなくなる」という気持ちでなんとか乗り切ることが出来ました。未来の先生展 2017 を無事に終えた後には、同じようなイベントもいくつか開催され、教育業界を盛り上げることに少しでも貢献できたのではないかと考えています。

そして、同じようなイベントが生まれてもなお、我々が 2020 年にもまた、未来の先生フォーラム 2020 として開催できるのは、他でもなく最初にお話した**理念を大切にしていることや、「つながり、広がり、生まれる」場の必要性に共感してくれる賛同者によって支えられているから**だと思います。

——立ち上げの時のビジョンに賛同・参加して下さる方の支えもあって、唯一無二の未来の先生フォーラムは作られているんですね。今後、ますます活動がパワーアップするよう感じますが、今後の展望はいかがでしょうか？

オンラインとオンサイト（直接対面）の強みを掛け合わせ、地域に根付く場を作る

宮田：オンライン開催の強みはボーダーレスをますます進められることです。「住んでいる場所に関わらず、気軽に参加できる気軽さ」が強みだと思います。一方でオンサイト（直接対面）によってこそ体感があり、協働や創造が生まれやすいとも思います。それぞれの利点を掛け合わせたハイブリッド型のイベントを実施したいと考えています。また現在は都内中心の開催ですが、今後は地域の実践に焦点を置き、地域に根差した場を作りたいとも考えています。コンセプトや理念、ノウハウを提供し、フランチャイズ的に「未来の先生フォーラム in○○県」というのも面白いと思っています。

——最後に、読者である高校関係者へのメッセージをいただけませんか？

宮田：時代や社会の変化に伴い、学校組織も、変わり続ける組織であることが求められています。

変わる、ということ考えた際に、「相互的主体変容」という考えがあります。かみ砕いてお話すると、自分がいて、相手がいるわけですが、自分が多面的な価値観の中で様々な取組に触れ、自分と相手と関わりあうことによって、自分と、社会や組織なども含む相手がより豊かな関係へと高められていくことが、多面的な実践や取組、知見が生成されていく基本的な営みのように思います。

また、変われ変われと圧力をかけられるのは非常にストレスフルなので、理想論かもしれませんが、やはり自分で感じて、動いて、自然と変わっているという状態が一番良いと思います。理性と感性という言葉があり、感動という言葉があるのに理動という言葉はありませんよね。何か思うところ、感じるところがあって人は初めて動く、変わるのではないかと思います。他者との関わりの中で、自然とより良いものが生み出されていくといいな、と思っています。

ぜひ、次回のイベントにお越しいただき、多様な実践家とつながり、広がり、そして変化を生み出してみませんか？今年のテーマは「問い直し」で、90の数のセッションが予定されています。オンラインでのご参加をぜひともご検討ください！

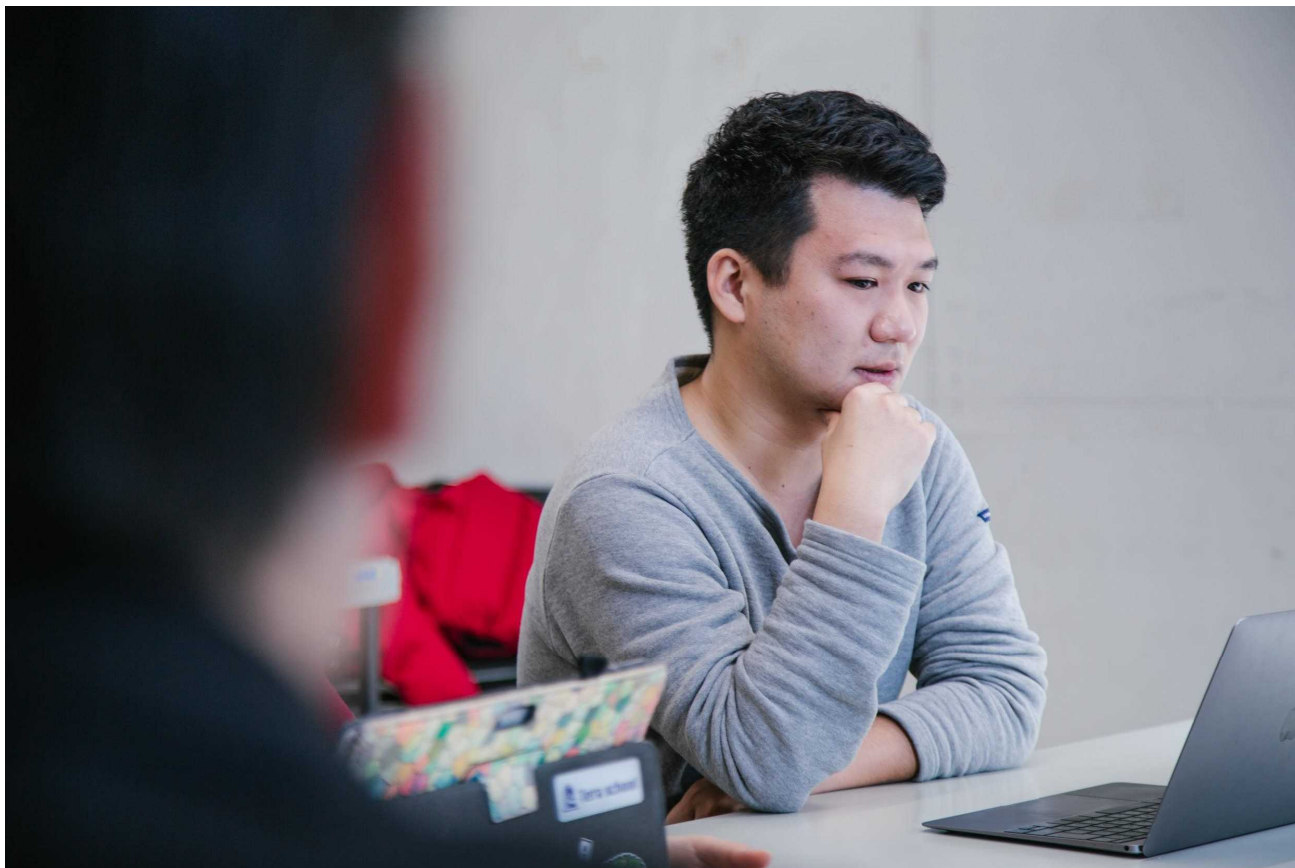
——本日は前向きなお話の数々、誠にありがとうございました！

おわりに：

編集部： 未来の先生フォーラムのウェブサイトからは見えてこない、理念を大切にしたい、少数精鋭の実行委員会と運営事務局の挑戦によって、日本最大級の教育イベントが行われているのだと知り、とても驚きました。「現状の否定をすることで誰かが来にくい場所にしない」ことを意識した、排除のないボーダーレスな場だからこそ、未来の教育の在り方を前向きに対話できるのではないかと感じ取れました。今年のイベントは11月22日（日）、23日（月・祝）の開催です！ぜひオンラインで気軽に参加してみてくださいはいかがでしょうか。

(4) SENSEI ノート

「先生」の日々の奮闘を、集合知で支えるオンラインプラットフォーム



インタビューにご対応いただいた浅谷氏

全国各地の高校、教育委員会による「挑戦事例」を紹介する本ポータルサイト「学び続ける高校プラットフォーム～みらいの職員室～」。令和2年度は、そのような挑戦者たちが繋がる「プラットフォーム」づくりに取り組む人々に焦点を当て、インタビューを行った。

「プラットフォーム」に関するインタビュー第5弾は、「SENSEI ノート」を運営する株式会社 ARROWS 代表の浅谷治希氏にインタビューを実施した。「SENSEI ノート」は、全国 2.5 万人の先生がオンラインでつながる大規模なプラットフォーム。教材を共有し合ったり、日々の困りごとについてメッセージをやり取りしたりと、全国の先生方が自由に情報交換をしている。プラットフォームの概要や、活発なやり取りが生まれている理由についてお話を伺った。

プラットフォームの概要

<p>目的・ビジョン</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 全国で奮闘する先生方の知見を皆で共有し、積み重なる課題に対して集合知で解決することを目的としている。 ◇ 日々変化する学校現場での悩みごとには、コンテンツのストックで対応するよりも、変化し続ける現場の先生同士がリアルタイムでつながる仕組みが重要との考え方。
<p>メンバー (体制)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 運営側の体制は、業務委託も含めて 15 名程度。 ◇ 会員審査、問い合わせ対応、内部のやり取りを活性化する機能の改善、プラットフォームの開発・実装、サーバメンテナンス等の業務に分かれる。
<p>取組の概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 全国の先生方がつながることのできる、大規模オンラインプラットフォーム。 ◇ 会員は、自由に情報提供や質問等を投稿できる。それに対し、リアクションボタンで反応したり、質問に対する返答が得られたりと活発にやり取りされている。 ◇ 会員は基本的に教員に限定。養護教諭や教育委員会・教育長に出向している教員、日本人学校の教員等も含まれるよう対象を拡大したが、民間企業や営利目的団体の参加は原則認められていない。
<p>「繋がり」のコツ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 【教員限定】会員を教員に限定することで、悩みや質問の前提の共有が少なくて済み、コミュニケーションコストが小さく済んでいる。 ◇ 【実名制】実名や勤務校を公開してやり取りを行うことが、安心・安全の土壌を生む大きな要素となっている。 ◇ 【気軽さ】普段働くコミュニティとは別のコミュニティであることも、どんな些細なことでも気兼ねなく質問がしやすい一因となっている。
<p>これからの姿</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ SENSEI ノートでは、リアルタイムで現場の先生方の悩みごとをキャッチ。これは、株式会社 ARROWS の他事業の展開においても非常に有益な情報である。 ◇ 今後は、これらの蓄積された情報を生かし、国や自治体の戦略作りにも携わっていただければと考えている。調査～開発～実装までワンストップで担える存在として存在感を出していきたい。

SENSEI ノートの構想のきっかけ

——本日はよろしくお願ひします。早速ですが、SENSEI ノートというつながりの場づくりに着手したきっかけを教えてくださいいただけますか？

浅谷（敬称略、以下同様）：きっかけは、現場の先生方の切実な声を耳にしたことでした。「授業はなんとか一人で工夫してやっている状況」「忙しくて校内の先生同士でも十分なコミュニケーションが取れない」・・・など、先生方が孤独に奮闘されている状況を知りました。そんな状況に対して、「それなら、インターネット上で先生同士がつながる仕組みを作ることができないか？」と、SENSEI ノートの構想に至ったんです。

SENSEI ノートは、年齢や立場、地域の制約なく、全国の先生方がオンラインで気軽につながることのできるプラットフォームです。SENSEI ノート上では、先生方の工夫が凝らされた教材の共有や、日々の悩みごとの情報交換が行われています。メインは後者の方で、活発にやり取りが生まれており、1人の先生が質問や悩みを書き込むと、それに対して何件も丁寧なコメントがついていますね。最近では、「コロナ禍の卒業式はどうしよう？」「音楽の授業で飛沫感染しないためには、どうすればよい？」「子どもたちが放課後遊びに行ってしまうのを防ぎたいのだが…」など、やはりコロナ関連のトピックが特に活発に動いていました。

——コロナ禍で、オンラインでつながる場の必要性が顕在化しましたよね。

浅谷：まさにその通りです。新型コロナウイルスの感染拡大によって、図らずもこのようなオンラインツールの意義を再確認することになりました。実際、ニーズは急速に拡大していて、SENSEI ノートのアクセス数も数十倍に膨れ上がっています。

また、学校が独自に情報収集を行い、意思決定できることの必要性も改めて感じています。もちろん、文科省や教育委員会からも通達が出されているのですが、コロナ禍に関してはそれでは間に合わなかった。過去の対応例もなく全員が手探りで、とても混乱が大きかったように思います。そんな中、オンラインで全国の先生とつながることができれば、日々の小さな悩みや疑問をはき出し、また同じ悩みを抱える他地域の先生と話ができて、「自分の学校ではこんな風にやりましたよ！」というコメントももらえるかもしれない。SENSEI ノートが、ある種の駆け込み寺のように機能していたのかもしれないですね。従来のコミュニケーション方法だけでは成り立たないということを痛感しました。

コロナ禍でオンラインの意義を再確認したと言いましたが、もともとオンラインの情報共有の場には必要性を感じていました。先生同士の情報交換以外で言うと、教員研修。現状、各自自治体でそれぞれ実施していますが、共通の内容であればオンラインで横につなげて行えばよいのでは？と思います。その方が財政的にも効率的でしょうし、PDCAを回すための知見や反省点もたまりやすいですね。

——なるほど。いろいろな制約を取り払って「横につながる」ことが、悩みの解決にもつながり、効率的だろうということなのですね。

浅谷：そうですね。先生方は、日々自己研鑽したり、問題解決に挑んだりと本当に頑張っていると思います。そして、そういったたくさんの実践知は全国に点在している。「SENSEI ノート」の理念に関わることで、各地にある実践知を効率

よく共有して、課題解決に役立てる、つまり「先生の課題を集合知で解決する」というのがコンセプトです。学校というのは日々変化する場所で、学期によっても、そして年度によっても課題は異なります。そのような場所に対し、コンテンツをストックしていくよりも、変化する状況の中にいる現場の人同士がやり取りをすることで、課題解決のヒントを得ていくというのが重要だと考えているんです。

SENSEI ノートの参加者や機能は？

——SENSEI ノート構想のきっかけや、その理念についてよく理解できました。それでは、どのようなプラットフォームなのか、参加者や機能についてもう少し詳しく伺えますか？

浅谷：まず参加者（会員）ですが、基本的には教員の皆さんに限定しています。最近、少し対象を拡大しているのですが、それでも養護教諭や教育委員会・教育長に出向している教員、日本人学校の教員などに広げたところまでで、企業や営利目的の方の登録は受け付けていないんです。これはやっぱり、日々忙しい中でも奮闘している現場の先生方の役に立ちたい、という想いが一番にあるからですね。「今日どうする？」「明日どうする？」といったような、日々のプラクティカルな課題について情報交換ができることが重要だと思っています。

SENSEI ノートに備わる機能としては、先生方が自由に投稿でき、返信としてコメントを書き込めるほか、「イイネ」ボタンのようなリアクションボタンもあります。また、投稿はトピックごとにタグで分けられており、自分の関心のあるトピックの投稿を見つけやすくなっています。先生からの投稿やそれに対する返信などを見ていると、見ず知らずの先生同士が、活発なやり取りをしているのは本当にすごいな・と思わされます。先生というのは、「知りたい」と思っている人、困っている人に分け隔てなく手を差し伸べる情熱が高い人たちなんだと改めて実感しました。素晴らしいですね。

活発なやり取りが生まれるワケ

——お話を聞いていて、参加者を「先生」に限定していることが、場の活性化の1つのポイントのように感じました。

浅谷：はい、同じ「先生」という条件があることで、悩みや課題を吐露する際に、その前提の共有が少なく済みます。ちょっとしたことのように、このコミュニケーションコストが小さい点は、場が活性化する大きなポイントだと感じています。また、場の「安心・安全」という意味では、「実名制」にしていることもとても重要ですね。先生方には、お名前と勤務先の学校名などを登録していただいています。昨今、SNSでも問題になっていますが、匿名だどうしても自分の発言に責任を持ってなくなってしまいがちです。先生というのは、もともとまじめで実直な方々が多いのですが、加えて実名制にすることで、安心感がぐっと大きくなるんですね。

また、「実名」を公開した生身の先生同士でやり取りをするわけですが、それが普段の生活とは切り離されたコミュニティであるということも、ある意味、場の活性化につながっていると言えるかもしれません。どうしても、実際に働く学校では、人間関係や地域との関係性が重要になるため、一種の遠慮みたいなものが生まれるときがあります。その点、SENSEI ノートに集

まっている人たちには利害関係がない。気兼ねなく話しやすいのだと思います。年齢や立場関係なしにやり取りができますし、逆に知らない人だからこそ聞きやすいこともありますね。

——オンラインだけど実名制、これが場の安心感につながっているんですね。対応に困るような内容を投稿されることはないのでしょうか？

浅谷：ほとんどありません。理由としては、SENSEI ノートに登録していただく際には、運営側で会員審査をしているためです。SENSEI ノートではたくさん「イネ」をもらったコメントを際立たせることで、他のユーザーに資する投稿をする動きが評価される仕組みとなっています。

もともと、日本の先生方は全体的にリテラシーが高く、基本的には場の質は保たれているように思います。事前に発言内容を規制したり、適切でない投稿を削除したりすると、先生方の自由な発言を阻害することにもなりかねず、かえって場の安心・安全を損ねてしまうのではないかと懸念しています。それよりも、先ほどお伝えしたようなサイト側のロジック設計によって、優先的な投稿を上に表示するなどの工夫をしておいた方がよいのではないのでしょうか。

持続的なプラットフォームであるために

——次に、SENSEI ノートがこれからも持続的な場となるために、何か取り組まれていることはありますか。例えば、参加者募集のための広報など…、いかがでしょうか？

浅谷：実は、広報活動は全く行っていません。もちろん立ち上げた当初は、このプラットフォームを知ってもらうために、先生方の勉強会に足繁く通ったりもしましたが、最近では完全な口コミで広がっている状態です。使ってみた先生が「いい！」と思ったら他の人にも勧められて、徐々に広がっていく。そのような形が自然で良いと思うんですね。ちなみに、スマホの普及も追い風になりましたね。職員室の PC から見てくださっている先生方も多いのですが、ガラケーからスマホになったことで、先生方のインターネット環境が当たり前のものとなりました。それによって、ちょっとした隙間時間を使ってアクセスしてもらうことも増えたように思います。

また、このプラットフォームが継続的なものであるためには、ある程度の会員数が必要だと感じています。そもそも、投稿するのは全員ではありません。ですが、一定数会員がいるということが重要で、積極的に発言するのが 100 人中の 5 %なのか、1 万人中の 5 %なのかによって投稿数は全く違う。投稿が多ければ、自分の悩みにヒットするものが必然的に増えるわけで、「これは使えるな」と思ってもらえる確率も高まるんです。会員を一定数集めるまでは大変ですが、ある臨界点を超えると、場は勝手に回りだす、むしろその動きに身を任せた方が良いという印象を持っています。

会社の事業全体で課題にアプローチ

少し視点は変わりますが、「会社としての持続性」という観点から、SENSEI ノートが事業としての価値創出につながっているかも重要です。SENSEI ノートの運営には、もちろん人件費やプラットフォームの開発・実装費、サーバメンテナンス費などがかかっていますが、先生方には無料で使用していただいています。これは、SENSEI ノート単体での収益化は行っ

ておらず、会社として他事業の利益から補填しているからなのですが、SENSEI ノートが単にコストセンターになっているかという、そうではありません。株式会社 ARROWS では、SENSEI ノートのほかにも、SENSEI イベントポータル、SENSEI よのなか学、SENSEI 多忙解消委員会などの事業を展開していますが、これらの事業にとって、SENSEI ノートにおける情報が非常に役に立っています。現場の先生方の困りごとをリアルタイムで追うことができるという強さが、会社の競争力の源泉となっているということです。我々が新たなチャレンジをし続けるための、非常に貴重な情報源ですね。

——SENSEI ノートが他事業にも寄与しているということ、大変興味深いです。もしよろしければ、お話に出てきた他事業の内容についても、簡単に伺えますでしょうか。

浅谷：SENSEI イベントポータルでは、インターネット上の様々な場所に点在している教育関連のイベント情報を、一つに集約しています。数年前までは、各イベントサイトが全バラバラに存在していたり、個人のブログの中にリンクが貼ってあったりと、かなり情報を見つけにくい状況でした。自分のためにも、そのような情報を一つにまとめたいと思い作成したのがこのポータルサイトです。「集合知によって課題を解決する」という SENSEI ノートの理念とも通じる部分がありますね。

SENSEI 多忙解消委員会というのは、学校の働き改革を支援するプロジェクトです。「学校の健康診断」を行い多忙化の原因を究明し、その解消に向けたアドバイスを行っています。ここでも、関わる学校が多くなるほど、自分たちに知見が蓄積し、よりよいプロジェクト実施につなげることができていますね。

また、課題の解決には現場のことを知るのが一番だと思っているので、現場の課題解決のための商品開発を目的として、教育委員会や学校に常駐するという働き方を全社的に取り入れています。委託関係ではなく、各地の教育委員会と協定を結んで、場所を借りてリモートワークを行っているイメージですね。

「知性」を体現する先生へのエール

——最後に、各地で奮闘する高校改革関係者の方々へのメッセージをいただけますか？

浅谷：ARROWS は、「世界的課題に取り組む知性の体現者であり続ける」ことをミッションとして日々仕事をしています。「なぜ学ぶのか？」という問いに立ち返ってみると、やはりそれは「これまで解決できなかった課題を解決する」ためではないかと思うのです。「知性」とは、「早く正確に問題を解く」ことではなく、「未知なる課題にじっくり向き合う」ことではないかと思うのです。

その知性を授ける先生は偉大な存在です。高校教育改革に本気で取り組むことは、とても骨の折れる作業だと思いますが、そんな時こそ知性（＝未知なる課題にじっくり向き合うこと）を大切にしてほしい。先生方は、それができるパワーを持っていると信じています。

——素敵なメッセージ、そして本日は貴重なお時間をありがとうございました！

おわりに：

編集部：運営側でテコ入れし続けるのではなく、あくまで先生方のニーズを尊重し、自然発生的にやり取りの生まれる場の設計に取り組まれているということ、まさに持続的なプラットフォームの1つの姿だと感じました。このような横のつながりが生まれることによって、全国の学校での悩みや課題に集合知を用いて挑み、少しでも先生方が健やかな日々を過ごされることを心から願っています。

(5) SCH シンポジウム

奮闘する実践者が「帰ってこられる場所」をつくる



第6回 SCH シンポジウムの様子

全国各地の高校、教育委員会による「挑戦事例」を紹介する本ポータルサイト「学び続ける高校プラットフォーム～みらいの職員室～」。令和2年度は、そのような挑戦者たちが繋がる「プラットフォーム」づくりに取り組む人々に焦点を当て、インタビューを行った。

「プラットフォーム」に関するインタビュー第4弾は、東北芸術工科大学デザイン工学部 コミュニティデザイン学科長の岡崎エミ准教授にお話を伺った。岡崎氏は地域との協働に取り組む高校の教職員、地域や行政の関係者、さらには高校生が一堂に会する場「SCH (Super Community Highschool) シンポジウム」を2014年より主催、運営している。その経験と、専門であるコミュニティデザインの理論をもとに、参加者の変容を支え、行動に繋げる場づくりのポイントについて伺った。

プラットフォームの概要

<p>目的・ビジョン</p>	<p>◇ 「高校と地域との協働」というテーマに関して、それぞれの課題感を持つ高校関係者、地域関係者や、行政の三者が集い、ともに課題を共有し、行動について考えられる場をつくる</p>
<p>メンバー (体制)</p>	<p>◇ 大学が三者を仲介する立場となり、実行委員会方式で運営。 ◇ 大学生も、当事者、かつ専攻するコミュニティデザインの実践の場として運営に主体的に関わり、現在ではプログラムの検討から司会まで学生が担っている。</p>
<p>取組の概要</p>	<p>◇ 2014年から毎年、「SCH シンポジウム」を東北芸術工科大学で開催。全国から高校と地域との協働に取り組む実践者が山形に集い、2日間にわたり事例の共有やワークショップ、対話を行う。</p>
<p>「繋がり」のコツ</p>	<p>◇ 懇親会やアイスブレイクの場を大切に、チームとしての一体感をつくり出すこと、恥ずかしいこと、悩んでいることでも開示することができる安心の場をつくり出すことを重視。</p>
<p>これからの姿</p>	<p>◇ 高校と地域との協働に関する新たな実践が生まれる実験的な場であることを維持しつつ、イノベーター層にとっての場、マジョリティ層にとっての場の意味を改めて検討しながら、役割を再定義する段階に差し掛かっている。</p>

SCH シンポジウム開催の経緯

——本日はよろしくお願いします。SCH シンポジウムは私も何度か参加させていただいているのですが、6年前に、そもそもこういう場をつくらうとしたきっかけは何だったのでしょうか？

岡崎（敬称略、以下同様）：第1回 SCH シンポジウムを開催した2014年は、私の所属する東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科が開学科した年でした。前年度から、新学科の学生募集のためオープンキャンパスなどで現役の高校生と会う機会が増えていたのですが、その時、率直に言って「いまの高校生って、大丈夫！？」と感じてしまったんです。進路相談会で高校生と話していた時、高校の管理的な指導方針に対して、感情が高まり泣き出してしまふ生徒がいたことが今も印象に残っています。その後も色々話を聞くと、東北の高校では、相変わらずの詰め込み型の学習指導で、受験対策の補講も高校内で高校の先生が行う。進路指導も国立公立至上主義で、AO入試を受けたくても受験できない。社会がこれだけ変わっているのに、それに対応した本質的な学びができていないのであれば、もったいないと思ったのです。

私はまちづくりが専門なのですが、市民ワークショップの現場では、「高校生は忙しくて出てこれない」というのが常識でした。だから、「ワークショップに高校生も参加できたら、社会を知る経験になるし、進路選択にも役に立つのにな」とモヤモヤしていました。そのようなタイミングで、ちょうど巡りあわせで、同じような問題意識を持って高校のキャリア教育のあり方を変えていこうとされている複数の先生方に出会うことができました。先生方がおっしゃるには、「詰め込みをしてももう成績はあがらない。学力をつける前に、なぜ学ぶのか、という動機付けが必要」と。そして、高校生が地域に飛び出して、地域を知ること、地域の人と話すことが、学ぶことの動機づけを高めていく。そんな実践があることを知りました。

高校は、生徒の学びへの動機づけに困っており、地域にその活路を見出している。まちづくりの立場から見ると、地域側も、高校生が地域に出てきてくれたら活気が出る。行政としても、高校生に地域のことを知ってもらわないと、そこに将来帰ってくるという選択肢にならない。教育側、地域側、そして行政の三者の課題感は大枠で合意できること、そして、その三者が課題を共有して繋がる必要があること、そして繋げる役割を、自身と新学科（コミュニティデザイン学科）が担いうる、という図式がここで見えてきました。

——教育、地域、行政の三者を揃える、というのがこのシンポジウムの核となる価値観なのですね。

岡崎：その通りです。第1回では、その三者の異なる視点から同じ問題を見てもらうというために、シンポジウムの登壇者を選定しました。ただ第1回は、高校の先生の参加者はほぼゼロだったんです。行政や、まちづくり関係の人に会うのは怖い、と思われたのかもしれませんが（笑）2回目くらいから、各地で頑張っている先生が来てくれるようになりましたね。ちょうどその後くらいの時期から、新学習指導要領など、文科省の政策の中でも探究や地域との協働といったキーワードが出てくるようになりました。風向きが大きく変わったのはそのあたりからですね。

立ち上げ時に意識していたこと

——続いて SCH シンポジウムの中場づくりのポイントについて伺いたいと思います。先ほどの「三者が集う」といった核に加えて、当初意識した点はどのようなことでしょうか。

岡崎：まず、**強制的に参加させるのではない**ということがポイントだと思います。ここは、例えば教育委員会が主催する参加必須の研修などとは大きく違うところで、「**本当に来たい人に来てもらう**」ということを重視しました。第1回の告知方法もそれに合わせ、SNS を軸にした口コミを第一にしました。まずは課題感に強く共感する人だけを集めて、その人たちの対話の中から、課題を明確にする。何を変えたら次に進めるのかを考える。第1回は「**課題をテーブルに挙げ、共有する**」ための支援をする、という意識で始めました。

続く2回目では、明確化された課題に対して**自分たちは何をすべきか**ということをアウトプットさせることで、アクションを起こしていこうという流れをつくりました。ここから段々、各地域での具体的な行動が出てきはじめ、第4回あたりからは、各地の実践事例の共有ができるようになってきました。繰り返しますが、立ち上げ当初のワークショップの参加のデザインとしては、「**学ばせる**」という集め方ではなく、**学びたい人が集まり、その集団の熱量を高めて、アイデアを出すことをサポートする場所とした**、という点が重要です。

大学生の参加

岡崎：先ほど申し上げたような場の設計ができたのは、私自身ワークショップのデザインができて、人が何にモチベーションを感じて次のステップに至ることができるのか、知見を持っていたということもありますし、加えて、**大学生が関わっていたことも大きかった**と感じます。

——SCH シンポジウムでは、コミュニティデザイン学科の学生が司会やワークショップのファシリテーションなど、様々なことを担っていますよね。

岡崎：彼ら、彼女らは、つい最近まで高校生でした。**ある意味で SCH シンポジウムで扱う問題意識を、最も身近に感じている当事者**です。例えば、先進的な高校の取組を大学生に見せると、「私もやりたかった…」という学生は多い。当事者なので、高校改革へのモチベーションが高い。このことが場の熱量にもよい影響を与えています。

もちろんそれだけでなく、SCH シンポジウムは、コミュニティデザインを学んでいる学生にとっては、実践の場でもあります。2日間にわたる大人数かつ大人のワークショップを経験するチャンスはそうそうないものです。日頃の成果を確認する良い場になっています。

とはいえ、学生もまだまだ未熟です。ワークショップも緊張しながら頑張っています。失敗もします。でもだからこそ、大人も「かっこつけていいよね」と感じられる場になったのではと思っています。こうした雰囲気づくりは、非常に重要です。



大学生もワークショップに参加

「帰ってこられる」安心な場所づくり

——場の雰囲気づくりについてより詳しく伺えますか。

岡崎：SCH シンポジウムは、必ず2日間かけて開催します。その中でも、**懇親会とアイスブレイクを重視**しています。これらは、いわゆる研修だと優先度が低く、外されてしまいがちですが、SCH シンポジウムでは、むしろここに様々な意図やコンテンツを盛り込んでいます。

1日目の夕方～夜に懇親会を設けます。1日目は事例紹介などのインプットが中心なので、参加者は「早く頭の整理がしたい、自分の考えを共有したい」と思っています。そこで、共通体験をした者同士、お酒の力も借りながら、とにかく話してもらいます。アウトプットすることで、共感も得られますから、次の一歩へのモチベーションにも繋がっていくのです。あと、花笠音頭（山形花笠まつりで披露される歌と踊り）を踊ってもらいます（笑）さらに翌朝はみんなで「さくらんぼ体操」（笑）これも意味があるんですよ！「**恥ずかしいけどやってみる」「同じ踊りでシンクロする」経験から、一体感を感じてほしい**んです。言い換えると、**チームになることで、勇気づけられる。あるいは、私にもできるという気持ちになる。そういう経験を積んでほしい**と思っています。

それぞれの学校、地域で実際に取組を進めるのは、当然、簡単にはいかない「茨の道」です。でもここに来たら、恥ずかしいことも失敗もOK。悩みも言えて、元気になれる、という雰囲気をつくりたい。「**帰る場所をつくる**というのは、各地で各人が改革に取り組むうえで欠かせないものだと思います。



参加者皆で花笠音頭を踊る

場の持続性

——シンポジウムの運営や、今後の持続に向けた見通しについても伺いたいと思います。まずは運営体制の現状と変遷について伺えますか。

岡崎：3年目に「SCH 東北」という学生団体を立ち上げました。学生が、当日の司会から、プログラムの作成、その前提となる「問い立て」まで主体となって取り組んでいます。私は広報担当やシンポジウム登壇者とのつなぎ役として、徐々に主軸を学生に移していった形です。SCH シンポジウムは毎年2月頃に開催しますが、学生は前年の10月頃から、過去の企画を振り返って、どういうステップでSCHシンポジウムが成長してきたのか、そしてその間、世の中はどのように変化してきたのかインプットを行い、それを踏まえてプログラムを考えてもらっています。

——SCH シンポジウムは今年で7回目を予定しています。その間、地域との協働というテーマも広く認知されるようになってきたと思います。当初、「本当に来たい人に来てもらう」という熱量の高い場だったこのシンポジウムにも、変化の兆しはあるのでしょうか。

岡崎：こうした場には、「イノベーターがいる」ということが重要ですね。そうした人や地域が集まることで、マジョリティの心にも火を点けるのです。一方で、イノベーターという更なる高みを目指す人にとって、継続的に参加することのメリットをどう感じてもらおうのかという点は悩んでいます。イノベーターが参加したいと思える場づくりと、裾野を広げることの両立をどう図るか、なかなか悩ましい問題です。

初回から参加して下さっている方からは、SCH シンポジウムは、「自分たちが現状どこにいるのか。やってきたことの何がよくて、何が悪かったのか、振り返ることができる重要な場になっている」と価値を感じてもらっています。ただ、同窓会っぽくなっているところもあるのかなど。場の意味、役割を改めて考える段階になっているのかもしれない。

いずれにせよ、引き続き実験的な場所であり続けるのは大切だと考えています。全国でも様々な事例が出てきていますが、イノベーターがいたからできた、という事例だけでなく、地域や、教育委員会などが真に対話し、アクションをするための実験的な場は必要と感じています。

あと、今年度は新型コロナウイルスの影響でオンライン開催になります。懇親会をどうするか、あのなんとも言えない熱量をどう再現できるのかは、心配の種です。これまでは、参加者は冬の山形に、片道数時間かけてわざわざ来んですよ。すごくないですか？熱量が高いのはある意味当たり前ですよ(笑)それだけ、覚悟のある人が集まっていたんですが、オンライン化で参加のハードルは下がるけど、どうなるか。

あとは、直接会うからこそできる「言語化できない学び」が成り立たないので、方法は工夫したいと思います。実は、こうした場で参加者に一番出してほしいことは、**悩みや困り感**です。それが見えて初めて、解決するための投げかけができるので。雑談できる場があると、そこでぼろっと悩みが出てくるものです。こうした、**目的があるようでないような場**、というのはワークショップでは非常に重要で、参加者が次へ進むエネルギーになるのですが、そこをどう保障するか。

そうした意味で今年度は一つの山場ですね。



本ポータルサイトでも取材を行った広島県立大崎海星高校も、SCH シンポジウムには毎年参加

変わることへの恐怖を受け止められる場合へ

——最後に、学び合いの場づくりに関わる高校教育関係者の方へのメッセージをお願いしますか？

岡崎：学びとは、人を変容させるものです。ゆえに、参加者に「最後にはこうなってほしい」という意図がない学びの場には意味はありません。正しい知識を効率的に頭に入れば、人は動ける・変わる、と思っている人が多いように感じます。ただ、残念ながら人はそんな単純ではありません。学校現場や職業研修をはじめ、人の変化を促す場づくりにおいては、まずはこうした**人の複雑性を理解すること**が重要だと思います。

私たちが立脚する「コミュニティデザイン」や「ワークショップデザイン」は、まさに時代の変化に対応迫られている「人間と社会の変容を支えるデザイン」です。教えた伝えたで満足するのではなく、一歩前に進めたという学習者主体の学びの場づくりが何よりも大切だと考えています。

その人の、社会に対しての考え方や、個人的な思いなどまで踏まえて働きかけないと、人は行動には移せません。誰でも、**変わることは怖い**のです。だから、人と繋がることで、その恐怖を少しでも減少させたり、**頑張ってみよう**と感ぜられる場が、重要なのだと思います。生徒に教える前に、まずは大人の私たちが、変容する苦しさ楽しさを味わうことから、はじめてみませんか？きっと見える世界が変わってくると思います。

——本日は貴重なお時間をありがとうございました！

おわりに：

編集部：プラットフォームや研修というと、これまでは「学びに行ってくる場」と捉えていましたが、「帰ってこられる場」としてとらえる視点は非常に新鮮に映りました。帰ってこられるという安心感をつくることは、最後に出てきた「変わることの恐怖」を和らげるという観点にも通底する、場づくりの非常に重要なポイントだと感じました。(K)

高校、地域、行政の三者の課題感からスタートしたプラットフォームが、実践段階で元高校生として課題感を持つ大学生が加わったり、高校生自身がプラットフォームに参加・発言するようになっていったりと、高校改革の様々な当事者のものになっていく様子が見えてきました。高校という場（コミュニティ）を改革していくうえで、その当事者の参画をどうデザインしていくのか、そのヒントがここにあるように思いました。(A)

(6) コンソーシアム IKUNO

「生徒第一」をモットーに探究学習を支える、高校と地域との「輪」



生野銀山フィールドワーク

全国各地の高校、教育委員会による「挑戦事例」を紹介する本ポータルサイト「学び続ける高校プラットフォーム～みらいの職員室～」。令和2年度は、そのような挑戦者たちが繋がる「プラットフォーム」づくりに取り組む人々に焦点を当て、インタビューを行った。

「プラットフォーム」に関するインタビュー第6弾は、兵庫県立生野高等学校。生徒の探究学習を支える地域コンソーシアムを組成し、高校と地域とが連携してカリキュラム開発等に取り組んでいる。本インタビューでは、生野高校における「高校と地域との協働」を主導する、松原正和先生にお話を伺った。

プラットフォームの概要

<p>目的・ビジョン</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 教科学習や進路選択を支える、根っこの部分となる資質・能力（「自ら行動し学ぶ力」、「社会人基礎力」等）を育てることを目的として、地域と協働した探究学習を実施 ◇ 生徒の関心に基づいた探究学習を支える「コンソーシアム IKUNO」を組成
<p>メンバー (体制)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 構成メンバーは、市役所、社会福祉協議会、観光協会、企業・商工会、金融機関、NPO 法人、大学、地域自治団体、幼・小・中学校など多様な主体 ◇ 地域内外の各種団体とつながりをつくり、生徒の学びを支える協力体制を構築
<p>取組の概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ コンソーシアムのメンバーをはじめとした地域人材は、生徒の興味関心に基づいた内容を、地域の専門家として継続的かつ柔軟に助言し、学習支援を行う ◇ インターネット上では分からない「生の声」「生の情報」を提供して、生徒の学びを深めるサポートを行う
<p>「つながり」のコツ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 「ゆめいく！」という探究学習の愛称が、生徒・教職員・地域など多様な主体の共通言語としてコミュニケーションを促進し、生野高校や生野高校の生徒への関わりに親しみを持ち続けられている ◇ 「生徒第一」を徹底。生徒の興味関心を一つの指針として、学校と地域との距離がぐっと近くなる
<p>これからの姿</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 教職員・地域全体での組織力を高めていくことが今後の課題 ◇ 教職員、地域人材いずれも立場の鎧を脱いで、フラットな協力体制を築いていくことが理想

「地域との協働は必然」－地域性が探究学習の後押しに

——本日はよろしくお願いします。近年、「高校と地域との協働」が大きな潮流となりつつありますが、生野高校でも地域と協働した探究学習を積極的に進めていらっしゃるように思います。そのきっかけは何だったのでしょうか？

松原（敬称略、以下同様）：本校において地域協働による探究学習に取り組み始めたのは、平成 28 年ごろだったと記憶しています。新学習指導要領についての議論など、国の動きの影響もありますが、生徒たちに社会を生き抜く力を身に着けてほしいと、当時の校長が主導して取り組み始めました。

もともと、学校のある朝来市は観光資源が豊富で、学校教育への支援も手厚い地域であることが探究学習の根幹にあるように思います。探究学習を行うにあたり、フィールドワークは切っても切り離せないものですが、朝来市の場合は前述のとおり地域の中に学習に活用できる資源が多く存在しており、例えば、生野銀山や日本ハンザキ研究所など、フィールドワークを充実したものにしてくれる素材があると言えます。

このような地域特性を考えると、探究学習を行うにあたり「地域と協働することは必然だった」と考えています。

そして、2019 年度には、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定校として指定されました。この事業をきっかけに地域コンソーシアムを組成し、より本格的な地域協働の取組に着手しています。



日本ハンザキ研究所フィールドワーク（オオサンショウウオの測定）

——地域資源が豊富だった地域に、「探究学習」という学びの方法がうまく合致したのですね。コンソーシアムには、どのような方が参加されているのでしょうか？

松原：生野高校では、「コンソーシアム IKUNO」と名付け、地域内外の各種団体とつながりをつくり、生徒の学びを支える協力体制を構築しています。構成メンバーですが、例を挙げると市役所、社会福祉協議会、観光協会、企業・商工会、地元の信用金庫、NPO 法人、大学など、本当に様々です。

先ほどお話ししたとおり、生野高校と周辺地域とはかねてより交流があり、本校の OB・OG や保護者とのつながりも強い地域だったという特徴がありました。生徒数 200 人弱の小規模校ですが、創立 100 年を超える歴史ある高校でもあります。地域の人々にも、「地域に根付いた学校だ」「生野高校をこの地域に残したい」という想いが強くあるように思います。そ

のような歴史に裏付けられた強いネットワークゆえに、コンソーシアムの組成には、それほど苦勞しなかったというのが正直なところですね。

新しい探究学習「ゆめいく！（you make!）」が目指すもの

——これまでに築き上げてきた学校と地域のネットワークも生かして、コンソーシアムに参画してくれる仲間を見つけられたのですね。それでは、その「コンソーシアム IKUNO」と協力して行う探究学習はどのようなものか、教えていただけますでしょうか？

松原：まさに現在、探究学習をリニューアルしたところですので、その内容についてご紹介させていただきます。生野高校では、今年度より、新しい探究学習「ゆめいく！（you make!）」を行っています。このネーミングは、「夢を育成する（＝夢を見つける、夢に近づく）」という意味と、「you make（自ら人生をデザインする、つくっていく）」という意味の2つの意味を持っています。



「ゆめいく！」の愛称とロゴマーク

松原：「ゆめいく！」では、これまでの学校教育で重視されてきた教科学習や進路選択を支える、根っこの部分となる資質・能力を育てることを目的としています。それは例えば、「自ら行動し学ぶ力」や、「社会人基礎力」などが挙げられます。探究学習によってこれらの資質・能力を育成することによって、生徒が自ら自分の興味分野と向き合い、「夢」を見つけ、その実現に向け、従来の教科学習や進路の実現にも主体的に取り組むようになる、という好循環を期待しています。

カリキュラムとしては、1年次に興味分野の発見や目標の設定につながるような探究学習を個人で行います。2年次はグループ活動になり、課題解決の方策を提案・実践し、その成果を発表してもらいます。3年次は1、2年次の取組をもとに、個人でその研究成果を論文にまとめ、発表してもらいます。

また、関心に応じて発展的に学習できる機会も設けています。希望者が「総合科学技術探究Ⅰ・Ⅱ」「郷土理解」「食文化」「異文化理解」「観光研究」「観光英会話」「ホスピタリティ」等の科目も選択できるようにしたり、部活動「まちづくり

部」においてさらに実践的な活動を行うことができるようにするなど、授業と部活動で横断的に探究活動に取り組むイメージを描いています。

「ゆめいく！」という愛称にも込められていますが、「先の見えない社会の中でも、適切に情報収集を行い自ら判断する人物」、「未知なる地域課題に対しても、新たな解決法を考え抜いてチャレンジする人物」など、主体的で能動的な人材の育成を目指したいと考えています。

探究学習を支えるコンソーシアム運営のカギは？

——なるほど。「ゆめいく！」というのは素敵な愛称ですね。創作されたロゴマークを拝見しても、このネーミングを大事にされているように感じます。

松原：そうなんです。実は探究学習を進めていくにあたり、皆で共有できる言葉やキーワードがあったほうが良いのではないかという話になりました。探究学習は、生徒と教員だけではなく、コンソーシアムのメンバー、その他の地域の人々など様々な主体が関わって実現するものですからね。何か共通言語になるようなものがあれば、それをキーワードとしてよりコミュニケーションがとりやすくなるだろうと考えました。そこで、教員の発案で「ゆめいく！」という探究学習の愛称が誕生したんです。この愛称に、コンソーシアムのメンバーも含め多くの関係者が親しみをもって大切にしているように感じます。

愛称を考えるのと同時に、「ゆめいく！」のコンセプトペーパーを作成し、職員研修でも共有を行いました。今年の6月には生徒に、8月にはコンソーシアムのメンバーにも共有しており、改めて目標を皆で共有できたことはよかったなと感じています。なぜやるのか、何を目的にやるのかという想いの共通認識があることで、ずいぶん取り組みやすさが異なってくるように思いますね。

——「ゆめいく！」という愛称が、多様な主体をつなげる1つの核になっているのですね。先ほど同った通り、「コンソーシアム IKUNO」には本当に様々な立場の方々が参加されていて、生徒の探究学習にも多様な方が関わられていることと思います。そのような人々となつなかり合う際に、何か心がけていることはありますか？

松原：コンソーシアムの運営方法で工夫している点としては、「生徒の意思を尊重すること」でしょうか。実は、コンソーシアム立ち上げ初年度となる昨年度は、学校側と地域側の想いがうまく噛み合わないな、と思ったことがあったんです。かねてより地域と交流のある高校ではありましたが、ことカリキュラム開発に関しては十分な関わり合いはなく、考え方のミスマッチが起こっていたように思います。例えば、フィールドワークにおける調整がうまくできておらず、生徒が調べたいと思っていることと、地域側が話を聞きに来て欲しいと思っていることがちぐはぐでした。探究学習として、インターネットで取得できる情報以上の、「生の声」を得ることを理想にしていたのですが、なかなかそこまでは至らなかったように思います。結果的に、学校と地域との連携・コンソーシアムの運営もやや形式的になってしまったなという反省点がありました。

これを踏まえ、今年度は生徒の調べたいことを第一に、教職員や地域の大人がそれをサポートするという姿勢を徹底しています。「ゆめいく！」の中間発表会にはコンソーシアムのメンバーをはじめ地域の方々を招き、生徒の発表を聞いて、助言をいただいています。生徒にとっても学びになることは勿論ですが、教職員を含めた大人たちが生徒の発表を間近で聞くことで、生徒自身の関心や想い、熱量を確認でき、それを一つの指針として連携を深めていくことができるんです。生徒

を第一に考えるようになったことで、形式的なつながりではなく、有機的な連携になりました。学校と地域との距離もぐっと近くなったような感触がありますね。



ゆめいく！中間発表会後のコンソーシアムメンバーからの指導・助言

学校と地域とをつなぐコーディネーターの存在

松原：また、コンソーシアムの運営や地域人材との橋渡しにおいては、地域コーディネーターにも大きな役割を果たしていただいています。

——地域コーディネーターとして、どのような方がご活躍されているのでしょうか？コーディネーター方の活動内容についても、詳しくお聞きしたいです。

松原：元・朝来市の地域おこし協力隊（現在は離任）の方が2名、生野高校のコーディネーターとして活躍してくださっています。1名は現在東京在住、もう1名は朝来市に在住ですが、お二方とも地域コーディネーターとしての活動のほかに、NPOの活動等でも活躍されるなど精力的な方々です。

本校の教員は全員で20名弱と少なく、教員だけで地域人材の掘り起こしやコンソーシアム会議等の各種調整を行うとなると、非常に厳しい状況と言わざるを得ません。そういった中でも、現在のような積極的な地域協働を行うことができてるのは、なんといっても地域コーディネーターの方々のおかげです。生徒の興味関心に沿って、教員だけでは掘り起こすことのできない人材へのアプローチなどに、力を貸してくださっています。また、教員は4～5年での人事異動もあるため、どうしても人の入れ替わりがあり、新しく赴任してきた教員には、探究学習に慣れていっしょやらない方もいます。そのような教員に対しては、探究学習のやり方についてアドバイスもいただくなど、コーディネーターの方々の力は、事業を継続するという観点でも欠かせない、絶大なものですね。

カリキュラム開発という点では、もうお一方キーパーソンがいっしょやいます。コンソーシアムのメンバーでもあるのですが、教育行政学をご専門とされる福知山公立大学の江上直樹先生に、定期的にアドバイスをいただいています。江上先生とは

コンスタントに相談できる関係性を築くことができおり、毎週金曜日に2時間程度、江上先生などと「ゆめいく！」の授業づくりについてのミーティングを設けています。カリキュラム開発において、外部の専門家のアイデアや知見があることで、よりよいものに更新できているという実感がありますね。

——地域コーディネーターや外部の専門家の知見やネットワークを、大いに活用されているのですね。探究学習のやり方についてはコーディネーターから教員にアドバイスを授けることもあるなど、フラットで良い関係性を築かれているように感じられます。

松原：「フラットな関係性」は重要だと考えています。教員ができること、地域コーディネーターができること、コンソーシアムの地域人材ができることは異なります。それぞれの強みが一番生きる形で、フラットな連携体制を築くことが理想です。教員の異動があることを考えると、教員の役割と地域の役割が一部入れ替わってもいいのではないかと思うくらいです。教員には、「教員」という鎧を脱いで、フラットな気持ちで地域に馴染んでいてもらいたいですね。

授業づくりにおいても、今後も地域の方々に幅広く関わってほしいと思います。例えば、「ゆめいく！」の関連授業にもコンソーシアムのメンバーに関わってもらえるようになると、より持続的に探究学習を支える体制の構築ができるのではないのでしょうか。

持続的な取組に向けて：教員体制の充実。コンソの充実

——「持続的」というキーワードをいただきました。探究学習やコンソーシアムを持続的なものとするために、今後の課題となっていることはありますか？

松原：やはり、特定の教員に負担が集中してしまっているという課題があります。本校での地域協働による探究学習はまだ道半ばですので、今後すべての教職員が積極的に関わっていけるようにしたいと思っています。地域コーディネーターの方々のお力も借りながら、取組の浸透を図っていきたいですね。

また、コンソーシアムのネットワークを拡大することも目標にしたいと思います。既にたくさんの方々に参加いただけていますが、生徒の探究テーマも多岐にわたります。「生徒第一」という観点からは、探究活動を支える人々の「輪」をより広げたいという想いを抱いています。そして、将来的には、コンソーシアムのメンバーの中から、地域コーディネーターとして主導して下さるような方が生まれてくることを期待しています。

教職員・地域全体での「組織力」を高めていくことが、今後の課題です。

メッセージ

——探究学習を支えるコンソーシアムの役割や、その運営における工夫についてお話を伺いました。最後に、学び合いの場づくりに関わる高校教育関係者の方へのメッセージをお願いできますか？

松原：生徒が「学び」を楽しむことが重要だとはよく言われますが、それは、「学び」に関わる大人にも同じことが言えます。

本校においては、「生徒第一」をモットーに生徒の探究学習に教職員だけではなく、たくさんの地域人材が共通目標を持ちながら関わり続けています。そして、関わる人が増えれば増えるほど、「やりがい」や「楽しさ」を実感し、参画していると体感することが大切になってくるように思います。それが、高校と地域との「輪」を作り、広げるキーワードとなるのではないのでしょうか。

是非、関わるすべての人が楽しく、幸せになるような学びの実現に向けて、一緒に挑戦していきましょう！

——本日は貴重なお時間をありがとうございました！

おわりに：

編集部：もともと地域に根付いた高校だったということですが、改めてカリキュラム開発における連携の難しさを感じ、そこで一歩踏み出すため「生徒第一」という考え方を再確認したことなど、より踏み込んだ「地域協働」に向けた試行錯誤の様子が、非常に参考になりました。お話の中で出てきた「教員という鎧を脱いで、地域とフラットな関係性を築く」という言葉が印象的だったのですが、学校から地域に協力を要請するというスタンスではなく、両者が楽しさや幸せを感じるような関係性を築くことが、持続的な地域協働につながるのだろうと感じさせられました。今後の生野高校の挑戦に、引き続き注目していきたいと思います！

2-1. 情報発信強化の方法

「学び続ける高校プラットフォーム」の認知度向上のための取組として、学事出版「月刊高校教育」において、2020年4月～2021年3月の1年間、連載「学び続ける高校プラットフォーム ーみらいの職員室ー」を持ち、記事を執筆した。連載においては、ポータルサイト内で公開したコンテンツをもとに記事を作成した。

2-2. 記事タイトル及びスケジュール

2020年4月号～2021年3月号、各回の記事タイトルは以下の通りである。

		タイトル
2020年	4月号	「学び続ける高校プラットフォーム」とは
	5月号	「ビジョン」を共有し、改革へ漕ぎ出す
	6月号	ビジョンに基づく「ミッション」がメンバーの手に。改革着手が始まる
	7月号	地域・社会の変化を踏まえ、自らを変革する「アクション」
	8月号	学び続ける教員を持続的に支える、仕掛けとは
	9月号	「使える」評価の作り方？評価を「使える」組織の作り方？
	10月号	変革を新たなステージに導く「プロモーション」
	11月号	実践知をつなげ、新たなチャレンジを生み出す「場づくり」
	12月号	生徒の成長を育む「学びの土壌」
2021年	1月号	「学び続ける高校」の先にある10年後の姿とは？（座談会記事のご紹介）
	2月号	民間団体発意のつながりの場が教員の、今そして未来をつなげ、広げる
	3月号	連載最終回 「高校と地域との協働」への挑戦

2-3. 記事内容

月刊高校教育の記事では、「学び続ける高校プラットフォーム」のウェブサイトの導入となるよう、各回見開き2ページの範囲で構成した。読者が各学校の取り組み等のウェブサイト記事をより詳しく見たいと感じられるよう、共通する論点ごとにウェブサイト記事を簡潔に整理し、記事中の取り組みの魅力をわかりやすい表現で取りまとめるよう心掛けた。また、月刊高校教育の記事の締めくくりには、毎回ウェブサイトへのアクセスができるようQRコード及び検索キーワード（「みらいの職員室」）を掲載した。

(1) 5つの論点 (VMARM) に沿って

連載初回となる2020年4月号では、よりよい高校づくりにチャレンジし続ける高校関係者の取組を発信することを目的として開設されたウェブサイトについての趣旨を解説し、共通する価値観や、高校教育改革のポイントを紹介し、5月以降の記事読解のための導入を行った。特に「自発性、持続性、自律性」というキーワードと、ビジョン・ミッション・アクション・リフレクション・プロモーションの5つの論点を紹介した。

これを受け、2020年5月号、6月号、7月号、9月号、10月号では、ビジョン・ミッション・アクション・リフレクション・プロモーションの5つの論点から、各論点に沿った学校の事例紹介と、事例に通ずる共通の視点の提供を行った。

5月号では、学校の目指すべき姿や、生徒に身につけさせたい資質・能力など、高校改革にとって、そのエンジンを回すための燃料ともいえる「ビジョン」の論点を扱った。山梨県立吉田高等学校の「吉田高校グラデュエーション・ポリシー（通称：吉高GP）」と、岐阜県立多治見高等学校の学校教育目標の再定義の取り組みを簡潔に紹介した。現状の教育目標に課題を感じ、その見直しや整理を行った2事例から、納得感のある教育目標の重要性を示した。

続いて6月号では、改革のビジョンに基づき、具体的にメンバーに役割を付与するなど、推進主体を確立していく段階である「ミッション」の論点を扱った。若手教職員の主導する自分事の改革提案を行う東京都立稔ヶ丘高等学校の事例と、全員参加の学校づくりのための主体意識をはぐくむ宮城県仙台第三高等学校の事例の2つを紹介した。ビジョンに基づき改革の推進主体を確立している2事例からは学校の改革が「誰かのこと」ではなく「自分事」になるような仕掛けが重要であると示唆した。

7月号では、自発的、持続的、自律的という観点で注目したいものとして、高校や教員が自らを変革する「アクション」の論点を扱った。和歌山県立南部高校と徳島県教育委員会の事例を扱い、地域の産業人材の育成を大きな役割として教育活動を行う専門高校等が、地域の産業構造の変化を踏まえながら、過去の慣例にとらわれずに、高校・教員のあり方自体を変革させた様子を簡潔に紹介している。2事例の共通点として、①専門の垣根を越えることで新たなカリキュラムを実現したアクションであること、②その過程には、各専門の強みを活かしつつ、専門を越境する教員同士のチーム形成と相互理解があったことの2点を挙げた。

9月号では、ビジョンにもとづいた取組（アクション）を振り返り、改善していく「リフレクション」の論点を扱った。振り返りの観点から評価に着目し、評価疲れやエビデンス疲れといった課題を乗り越えるために、評価がしっかりと取組の改善に繋がる実感を得ることが重要だとし、島根県立隠岐島前高等学校、石川県立工業高等学校の2事例を取り扱った。2事例からは、「使える」評価の議論だけではなく、「評価が使える」組織とは？という問いに向き合うことの重要性を提起した。

最後に10月号では、改革の拡大、深化、継続のために、これまでの取組内容や成果をPRして、新たな取組の参加者・支援者、活動資金や情報などの活動資源の確保を目指す段階である「プロモーション」の論点を扱った。広島県教育委員会、福島県立川口高校の2事例を扱い、組織外からの関心を高める工夫によって、高校改革に取り組む仲間・支援者を募る様子を紹介した。2事例から、一歩先を見据えての多方面へのアプローチが、改革のエンジンを回し続ける鍵になるとの視点を提供した。

(2) プラットフォームに関する論点に沿って

続いて11月以降は、学び続ける高校プラットフォームの「プラットフォーム」に着目し、プラットフォームづくりに関連する内容を「場づくり」、「プラットフォームの試行（座談会）」、「民間団体発意のつながりの場」、「高校と地域との協働（関係者とのつながり作り）」の論点ごとにまとめた。

まず11月号では実践者が集い、つながる「場づくり」に着目し、島根県教育委員会の探究学習実践者をつなぐ「研修」の仕掛けや、教育・学びの未来を創造する教育長・校長プラットフォームの新しいチャレンジを生む「場づくり」を紹介した。学校・地域・立場の垣根を越えて、実践者がつながりあう場づくりを志向する2事例は、運営側自身も他者と連携することや、新型コロナウイルス感染症拡大の影響下でもオンラインの場を企画するなど、魅力的な「場づくり」に向け柔軟に挑戦し続けている様子を共通点として挙げた。

次に1月号では、繋がり場を試行するという狙いも込めて開催された座談会の概要を紹介した。この座談会は、過去に取材でお伺いした高校等でキーマンとして活躍する教員等が集まり、ウェブサイトの名称にもなっている「学び続ける高校」「みらいの職員室」「プラットフォーム」といったキーワードから、現在、そして未来の高校のあり方についての対話する場となった。座談会で議論になった「教職員の学び、つながりの現在地」、「学び続ける教員集団をいかにつくるか?」、「みらいの職員室を想像する」という3つのテーマについて取りまとめた。

さらに2月号では、学校や行政だけでなく、民間団体などの多様なステイクホルダーによるつながりの場に注目した。未来の先生フォーラム2020の未来志向・ボーダーレスを意識した大規模なつながりの場づくりと、SENSEIノートの教員の悩みをリアルタイムで解決しあうことを意識した、つながり続ける場づくりの取組を紹介した。2事例とも、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、一層注目を集めており、対面で繋がりにくい今だからこそ、教員の孤立を防ぎ、気軽につながれる場が求められている可能性を示した。

3月号では、「高校と地域との協働」を実現するための関係者の「つながり作り」という視点を取り扱った。高校と地域との協働に取り組む、様々な主体の集う場を提供するSCHシンポジウムと、探究学習を支える地域コンソーシアムを構築する兵庫県立生野高等学校の2事例を紹介した。いずれも「高校と地域との協働」に向かって、関係者の目的意識やモチベーションを見失わないための工夫が凝らされており、大学生や高校生のエネルギーがプラスの影響を与える点を共通項として示した。

(3) その他

このほか8月号では、各学校での事例とは異なる視点を提供する趣旨から、有識者から伺った内容をまとめている。この背景にはインタビュー対象となった各学校には学び続ける教員がいること、そして教員が孤軍奮闘して燃え尽きてしまわないような仕掛けがあると感じた点が大きい。こういった背景から中原淳氏、前原健二氏の2名のインタビューを紹介した。2名の専門やバックグラウンドは違えど、共通点として、学び「続けられる」職場になるための仕掛けへの指摘があったとし、自律的な学びの土台が、これからも持続可能なものであるためには、「チームになる」、「働き方改革」、「自主性を重視した研修」といった点の重要性を示した。

さらに12月号では、「生徒の成長（学び）を育む学習環境」にはどのような特徴があるのかという視点に着目し、令和4年度から年次進行で実施される新学習指導要領に触れながら、島根県立隠岐島前高校で導入している学習環境の良好さを評価するアンケートに着目し、アンケート項目を紹介している。生徒が「何を学ぶか、どう学ぶか」という授業づくりとともに、「誰と、どのような環境で学ぶか」という学習環境づくりが重要な要素であることを示唆した。

Ⅲ. ポータルサイトの運営

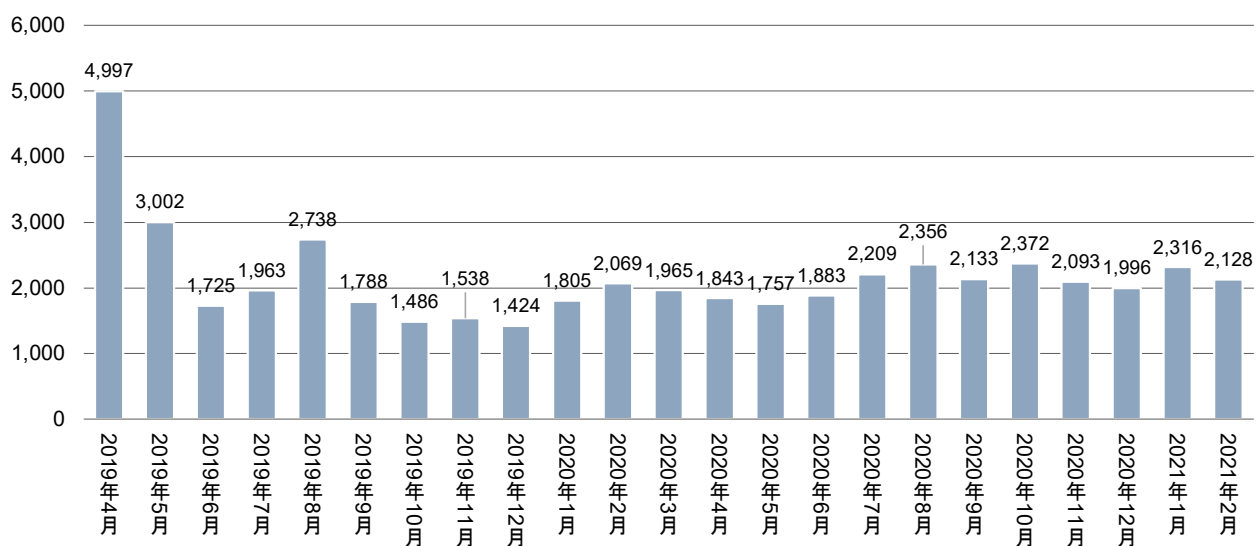
1 ポータルサイトの運営

1-1. PV 数の推移

2019年4月のポータルサイト開設以降、2021年2月末までのページビュー数は図表2に示すとおりである。公開直後のPV数が多いが、その後も新着記事公開、文部科学省メールマガジンやイベント等での広報のタイミングと合わせて、PV数に変動がみられる。

2020年度は、学事出版「月刊高校教育」にて、「みらいの職員室」記事連載を行い、ポータルサイトの広報活動を行った。2020年度は、安定して2,000前後のPV数を記録している。

図表2 ページビュー数（2019年4月～2021年2月）



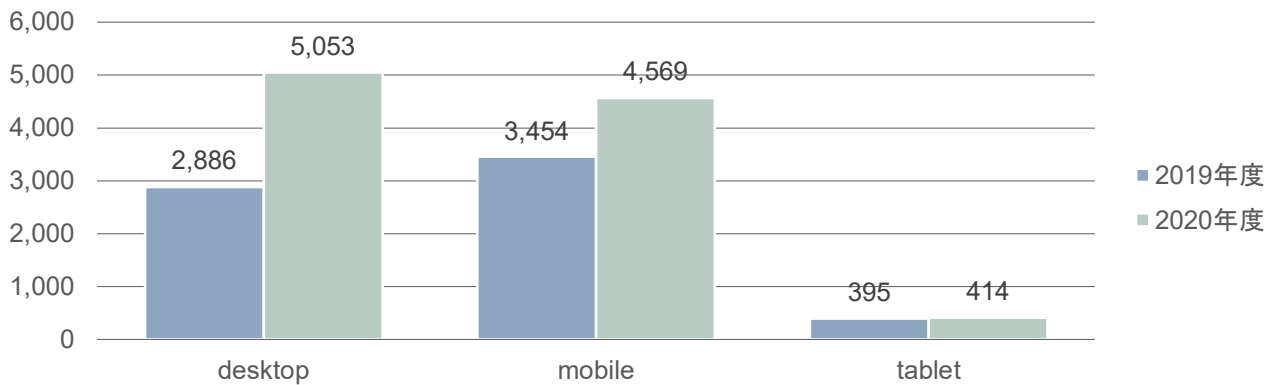
1-2. 訪問者デバイス及びブラウザ

2020年度（2020年4月～2021年2月）の訪問者の、使用デバイス及びブラウザを分析した。

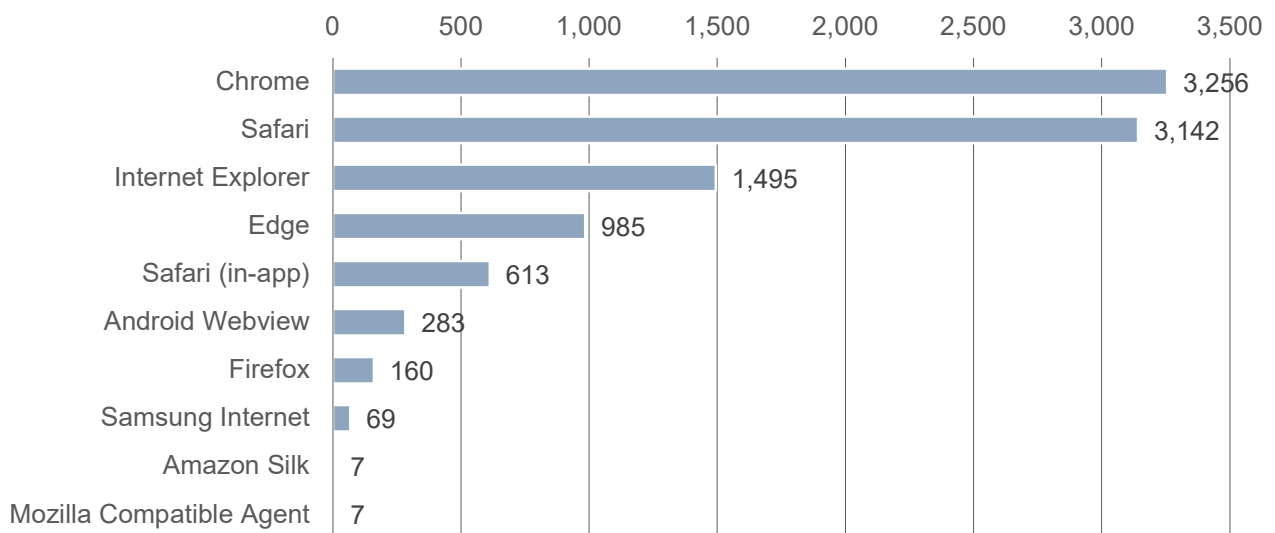
訪問者デバイスについて、昨年度の同時期（2019年4月～2020年2月）の訪問者と比較したところ、図表3に示すとおりであった。2020年度は全体としてアクセス数が増えていることが読み取れるが、訪問者デバイスでは「desktop」が増えており、携帯端末からのアクセスが多かった2019年からは変化が生じた。

また、訪問者ブラウザについては「Chrome」が最も多く、次いで「Safari」からのアクセスが多かった。PCからのアクセスが増えてはいるが、依然として携帯端末からアクセスも多い状況であり、引き続きモバイル向けのページは維持することが求められる。

図表3 訪問者デバイス（2019年度及び2020年度）



図表4 訪問者ブラウザ（2020年4月～2021年2月）

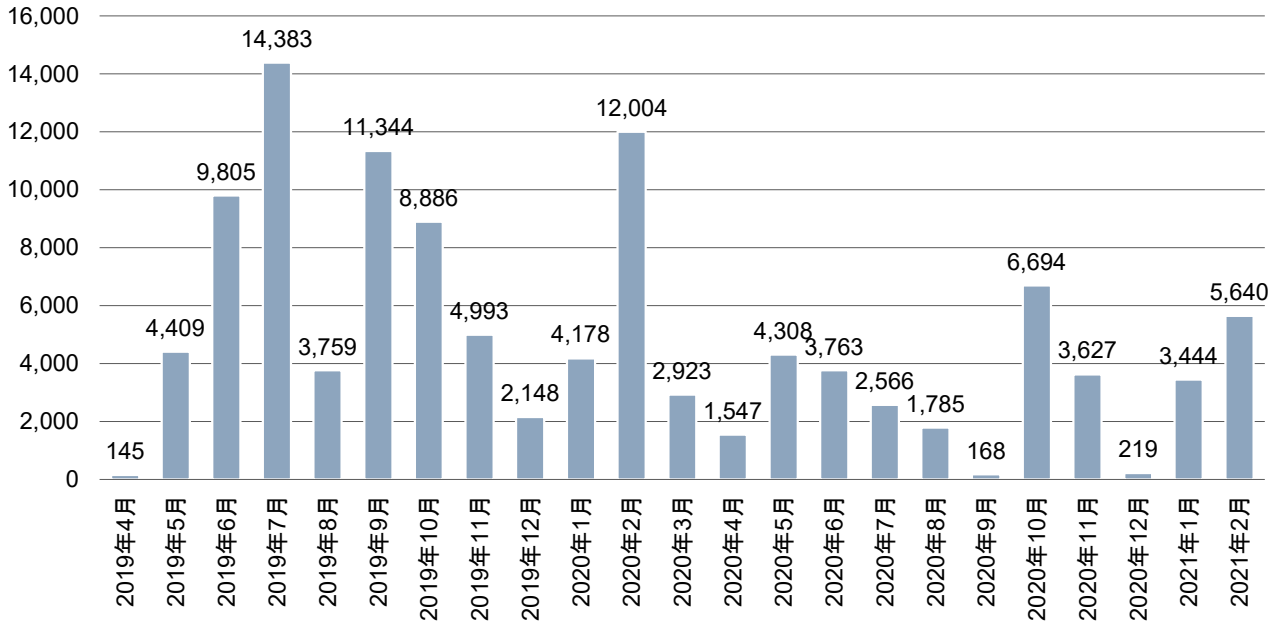


1-3. セキュリティアタック数

ポータルサイト開設後のセキュリティアタック数は、図表 5 に示すとおりである。月によるバラツキはあるが、いずれも想定の範囲内でのアタック数となっており、ポータルサイトのセキュリティ管理面において、特段の問題は生じなかった。

また、ポータルサイト開設当初と比較し、2020 年度はセキュリティアタック数も落ち着いてきている。

図表 5 セキュリティアタック数（2019年4月～2021年2月）



2 本事業終了後のポータルサイト運用体制の検討

2-1. 現在のポータルサイトコンテンツについて

「みらいの職員室」のコンテンツはすべて静的コンテンツ(HTML, CSS, JavaScript)のみで制作されている。したがって、web が運用できる環境であれば、特段の環境要件はほとんど無い。

2-2. ポータルサイト移管方法

令和3年2月現在、「みらいの職員室」ポータルサイトは「さくらインターネット」のサーバ上で管理しているが、令和3年4月以降は、これを文科省サーバ内で管理する。文部科学省サーバ内への移管に際し、「みらいの職員室」のページは文部科学省ホームページ (mext.go.jp) 内のディレクトリ構成とする。ディレクトリ構成とすることによって、以下の通りサイトの URL が変更となる。

【移管前】 <https://mirashoku.mext.go.jp/>

↓

【移管後】 <https://www.mext.go.jp/mirashoku/index.html>

2-3. 移管後のタスク一覧

以下に示すのは、「みらいの職員室」ポータルサイト管理・運営に係る、移管前のタスク一覧である。

図表 6 タスク一覧 (移管前)

① コンテンツ追加・更新	
コンテンツ(HTML, CSS, javaScript)の修正・追加 draft 環境への反映	不定期／新規コンテンツ追加時
(1) サーバーへのコンテンツ送信(scp)	
(2) 現在の draft 環境のコンテンツのバックアップ	
(3) (1)のコンテンツの draft 環境への反映	
(4) 表示確認	
本番環境での反映	
(1) draft 環境のコンテンツを本番環境へ	
(2) 表示確認	
② サーバー上のシステムの最新化	
(1) 更新可能なパッケージの確認	不定期
(2) 最新パッケージのインストール	
(3) SiteGuard のバージョンアップ	
③ セキュリティレポート確認	
(1) メール通知確認	毎日
(2) セキュリティレポート(サーバーから PDF ダウンロード)	毎月

④ SSL サーバー証明書の更新

- (1) 証明書の発行
- (2) 証明書の設定

証明書有効期限毎(次回 2021/3/18)

⑤ サーバーのレンタル

- (1) レンタル代の支払い(契約更新)

毎年(年払いの場合)

サイトの移管によって文科省 HP のディレクトリ構成となることにより、④SSL サーバー証明書の更新及び⑤サーバーのレンタルが不要となる。また、②サーバー上のシステムの最新化、③セキュリティレポート確認についても、文部科学省ホームページ全体として一括して行うと考えられるため、「みらいの職員室」ページ単体での対応は不要となる。

したがって、移管後のポータルサイト管理については、新規のコンテンツをアップロードする場合に限り、下記のタスクが生じる。

図表 7 タスク一覧 (移管後)

コンテンツ追加・更新

コンテンツ(HTML, CSS, JavaScript)の修正・追加
draft 環境への反映

不定期／新規コンテンツ追加時

- (1) サーバーへのコンテンツ送信(scp)
- (2) 表示確認

本番環境での反映

- (1) サーバーへのコンテンツ送信(scp)
- (2) 表示確認

IV. 3年間のまとめ

平成30年度から続いた本事業も、令和2年度で最終年度となった。平成30年度から令和元年度にかけては、高校・教育委員会の事例を中心としてコンテンツの拡充を図ってきた。事業最終年度となる本年度は、「学び続ける高校プラットフォーム」の名称の通り、高校・教育委員会の垣根を超え、広く高校教育関係者が集い、対話する場に着目し調査を行った。以下で、3年間の調査研究の内容について総括する。

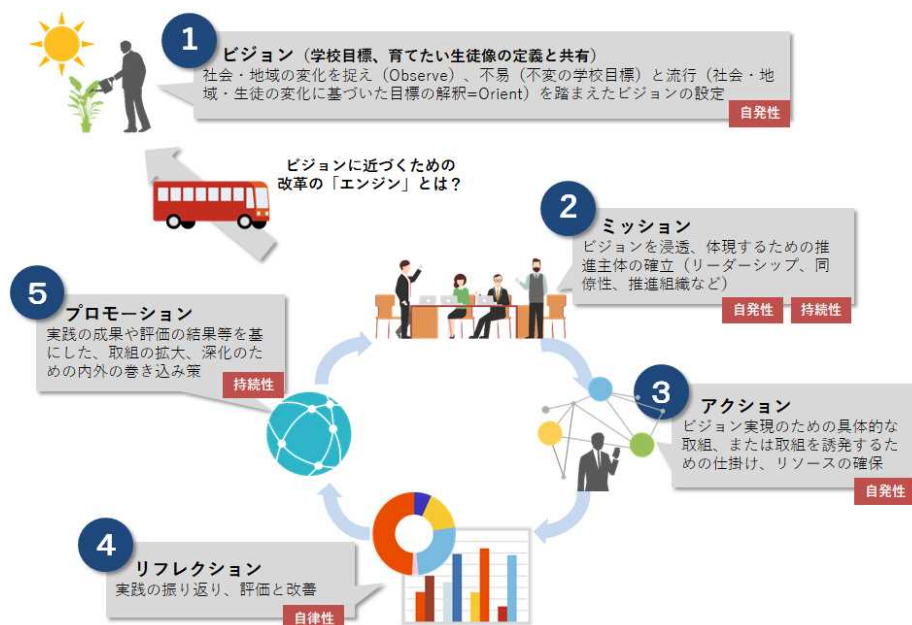
1-1. 学校・教育委員会の調査

全国の高校・教育委員会のヒアリング調査を実施し、20件の高校・教育委員会の記事を公開した。

事例調査においては、取組の内容やその成果のみに着目するのではなく、成果に至るまでの試行錯誤の課程についても目を向けることで、他の事例の参考となる情報を聴取できるよう心掛けた。また、高校教育改革に取り組む際の、学内の体制（教職員や生徒を巻き込んだ体制など）、学外の体制（地域住民などの協力体制など）にも着目し、どのような推進主体によって、改革の成果にたどり着くことができたのかを分析した。加えて、取組の振り返りを通じた改善活動や、実践の情報発信による取組の深化の在り方についても話を伺っている。

以上のような視点をまとめたものが下図である。これらの要素に着目し、各事例が「自発的、持続的、自律的」に高校教育改革に取り組むことのできたポイントを抽出し、記事としてまとめている。

図表 8 自発的・持続的・自律的な教育改革に取り組む高校が備える要素



注) 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング作成

1-2. 有識者へのヒアリング

昨年度は、学校や教育委員会の取組事例に加え、俯瞰的な立場から「学び続ける高校」の潮流についてまとめるべく、有識者インタビューを実施した。各高校等の取組事例では、個別の課題に対応した取組を扱う中でもロジックモデル等により体系的に個別事例の理解を可能としているが、各論や手法論のみの浅い理解に留まることも懸念される。こういった課題意識から、高校組織のあり方や高校改革全体の潮流を有識者の生の言葉で紹介し、個別の事例の本質を理解する助けとなることを期待した。

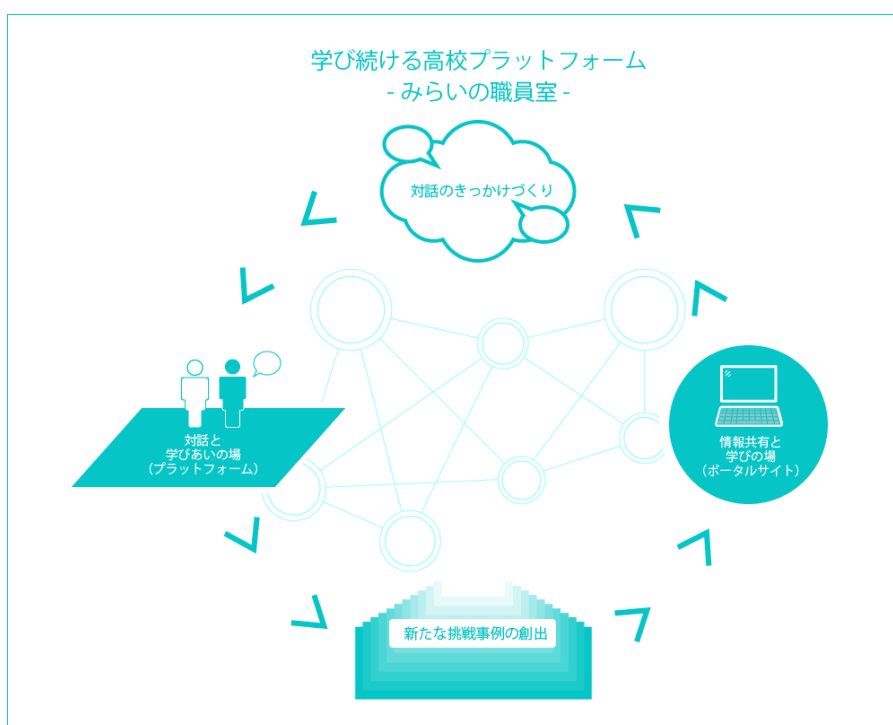
荒瀬克己（大谷大学 文学部教授）、中原 淳（立教大学 経営学部教授）、前原健二（次世代教育研究センター）の3名を対象に、2019年4月18日から2020年1月9日までの間、有識者インタビューを行った。荒瀬氏からは、高校教育を取り巻く外部環境（Society5.0、新学習指導要領等）を嚆矢に、高校教育改革を担う教員・生徒の役割や、開かれた高校の在り方まで幅広く話を伺った。その後、中原氏からは働き方の観点に着目し、高校教育改革を担う「チーム学校」の在り方や、教職員の働き方改革の実効策について話を伺った。最後に前原氏からは教員養成や継続的な教員の専門能力開発の視点から、「チーム学校」を支える教員育成の在り方や、教育現場における「地域・社会との協働」について話を伺った。

3名がそれぞれ活躍するフィールドごとに、多様な視点から高校改革全体の潮流について示唆を得ることができた。特に自律的に学び続ける教職員や高校を作り上げるための「環境づくり」について、学校現場で出来ること、教育委員会等の行政が出来ること、教員養成大学等で出来ることについて、前向きな改善提案を得られた。

1-3. プラットフォームに関する調査

ポータルサイトにおいては、各事例の紹介が主となっているが、本ポータルサイトにおける情報発信は、これらの情報を通じて「高校関係者が出会い、対話する場の創出につなげていく」というビジョンを持ったものである。その試行的な取組として、令和元年度には、それまで事例で紹介した教育関係者を5名集め、「自発的・持続的・自律的な高校教育改革のための『学び続けるプラットフォーム』とは？」というテーマにて座談会を実施し、3件の連続する記事を公開した。

図表 9 プラットフォームとポータルサイトの循環（イメージ）



出典) 学び続ける高校プラットフォーム HP より

令和2年度はさらに視点を広げ、教育関係者が集う「場づくり」に取り組むような団体に着目し、その取組の概要や場づくりのポイントについて話を伺った。行政や民間、学校単位など様々な立場から場づくり・つながりづくりに取り組む実践が集まり、6件の記事を公開している。

1-4. ポータルサイトの運営

これらの調査結果は、すべて記事として「みらいの職員室」ポータルサイト上に公開し、全国で高校教育改革に取り組む関係者への情報支援としている。本年度は、学事出版「月刊高校教育」への「みらいの職員室」名義での連載を持つことによっても、情報発信を強化してきた。

「みらいの職員室」ポータルサイトでは、タブ検索やアイデアキットページ、文部科学省関連情報ページなどを備え付けており、利用者が必要な情報にたどり着きやすいよう工夫を行っている。

図表 10 「みらいの職員室」ポータルサイトトップページ



図表 11 タグ検索機能

タグ絞り込み

基本情報	<input type="checkbox"/> 教育委員会 <input type="checkbox"/> 普通科 <input type="checkbox"/> 総合学科 <input type="checkbox"/> 専門学科 <input type="checkbox"/> 全日制 <input type="checkbox"/> 定時制・通信制 <input type="checkbox"/> 有識者 <input type="checkbox"/> イベント <input type="checkbox"/> プラットフォーム
地域	<input type="checkbox"/> 北海道・東北 <input type="checkbox"/> 関東 <input type="checkbox"/> 北陸・甲信越 <input type="checkbox"/> 東海 <input type="checkbox"/> 近畿 <input type="checkbox"/> 中国 <input type="checkbox"/> 四国 <input type="checkbox"/> 九州・沖縄
改革の背景	<input type="checkbox"/> 生徒の変化 <input type="checkbox"/> 生徒数の増減 <input type="checkbox"/> 学校・学科等の再編 <input type="checkbox"/> 地域の変化 <input type="checkbox"/> 経済・社会の変化 <input type="checkbox"/> 学力観・教育方法・入試の変化 <input type="checkbox"/> 教職員の変化
取組の内容・工夫	<input type="checkbox"/> 育てたい生徒像の明確化 <input type="checkbox"/> 学力の定着・向上 <input type="checkbox"/> 多様な力の育成 <input type="checkbox"/> 授業改善 <input type="checkbox"/> カリキュラム・マネジメント <input type="checkbox"/> 探究活動 <input type="checkbox"/> 生徒の支援・ケア <input type="checkbox"/> キャリア教育・進路指導 <input type="checkbox"/> 国際化・多文化共生 <input type="checkbox"/> 教職員育成 <input type="checkbox"/> 組織改編 <input type="checkbox"/> 評価ツールの開発・導入 <input type="checkbox"/> 地域との協働 <input type="checkbox"/> 企業・大学等との協働 <input type="checkbox"/> 業務効率化・働き方改革 <input type="checkbox"/> ICT/Ed Techの活用
特徴的な要素	<input type="checkbox"/> ビジョン <input type="checkbox"/> ミッション <input type="checkbox"/> アクション <input type="checkbox"/> リフレクション <input type="checkbox"/> プロモーション

図表 12 アイデアキットページ

目標を設定・共有したい	チームを作りたい・強くなりたい	業務効率化を図りたい
授業改善を促したい	成果を測りたい・振り返りたい	支援者を増やしたい

掲載されているアイデアキットのご利用にあたっては、リンク・著作権についてをご覧ください。

目標を設定・共有したい

吉高GPに基づいた授業や学校行事見直しの取組資料

吉田高校では、生徒に身に付けてほしい8つの力を教育目標「吉高GP」として明文化し、これに基づいた授業改善や学校行事の見直しを行っている。下記資料はそれらの取組で活用されるシートの一例である。吉田高校の教職員が自発的に作成しており、各教職員で個別に作っているものが横展開するなどして、「吉高GP」は今や学校運営の中心にあると言っても過言ではない。



GP評価表

ダウンロード



吉高GP振り返りシート（GPシートを基にした年間の振り返りシート）

ダウンロード



数学科 学習指導計画

ダウンロード



授業評価シート

ダウンロード



リフレクションシート

ダウンロード



8つの力養成指導計画（学校行事整理一覧）

ダウンロード

図表 13 文科省関連情報ページ

関連情報

高校教育改革に関する様々な情報をお届けします。

ホーム > 関連情報

- ・ 高等学校教育（文部科学省ウェブサイト）
- ・ 中央教育審議会 新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会 高校WG（文部科学省ウェブサイト）
- ・ 新学習指導要領（文部科学省ウェブサイト）
- ・ 高大接続改革（文部科学省ウェブサイト）
- ・ 学びの基礎診断（文部科学省ウェブサイト）
- ・ 地域との協働による高等学校教育改革推進事業（文部科学省ウェブサイト）

今後も、「みらいの職員室」のコンテンツを活用してもらうほか、このポータルサイトをきっかけとして、実践者のつながりが広がっていくことを期待したい。また、高校改革関係者に継続的にポータルサイトにアクセスしてもらうためには、「みらいの職員室」ポータルサイトがアクティブなものであり続けることが重要と考えられ、全国高等学校教育改革研究協議会の会議情報等、高校教育改革に関連する新しいコンテンツを、提供し続けることが期待される。

【今後の「みらいの職員室」ポータルサイト URL はこちら】

<https://www.mext.go.jp/mirashoku/index.html>

令和2年度高等学校における教育の質確保・多様性への対応に関する調査研究
学び続ける高校プラットフォームの運営・充実
事業報告書
2021年3月

発行：文部科学省

〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2

TEL：03-5253-4111

委託：三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社 政策研究事業本部

〒105-8501 東京都港区虎ノ門 5-11-2 オランダヒルズ森タワー

TEL：03-6733-1022